
飛ばされた2人のチート

にきにき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ばされた2人のチート

【Nコード】

N7529V

【作者名】

にきにき

【あらすじ】

どこにでもいる普通の大学生だった2人の青年がある日、神、という存在によってチート能力を与えられて異世界に飛ばされた。これは2人がチート能力を使い、異世界で生きていく、という物語である。

*2人と言いつつ、基本主人公は片方で、もう片方は暫らく登場しません。

飛ばされた2人と危険な神（前書き）

この物語は、主人公達がアニメや漫画の技や武具を使い、戦いますが、原作のキャラは登場しませんので、例えどこかで見た事があるようなキャラが

居ても、それは他人の空似です。

これを読んで、興味を無くした方、嫌悪感を感じる人は戻って下さい。

飛ばされた2人と危険な神

「いや、今日は楽しかったな。」

「そっか、それなら良かった。今度は、今日の続きを見せてやる」

休日、僕『端山 恵吾』は友人の『森田 一輝』家に行き、一緒にゲームをしたり、

ゲームのムービーを見たりした。

「おっ、それじゃあ楽しみにしてる」

そう言い自宅に帰ろうとした、その瞬間に光りと共に浮遊感を感じ視界が

ブラックアウトして

「へ？・・・」

「なっ！・・・」

意識を失った。

「う、うっっん・・・、えっと、あれ？」

恵吾は目が覚めて少しぼんやりとしていたが、意識が次第にハッキリとしてきた。

そして、周りの様子を見ると、周囲は真っ暗で何も見えなかった。唯一、見えたのは

隣で意識を失っている一輝だった。

「おい、一輝 起きてくれ」

そう言うが、一輝は目を覚まさない。一輝は、1度寝ると中々起きない。それでも、

何度か呼びかけると目を覚ました。

「んっん」。恵吾？ あれ、何で俺、寝てるん、だ……。って何だこれ？」

自分が真つ暗な場所に居る事が分かり、一輝は慌てだした。

しかし、恵吾はいたって冷静だった。

（え？何で僕は冷静なんだって？ ああ、それは、小説とかだと、
こういう展開の場合は

大抵こうしていると神様とかが・・・）

恵吾が何やら考えていると、目の前が淡く光り人の形になった。
「やっと目を覚ましたわね」

（ほらね、それで姿は可愛い女の子なんだ、よ、ね・・・って）
恵吾はその姿を見て愕然とした。なぜなら、その姿は

「化け物？！」

目の前に居たのは、2メートルはあろう身長に筋骨隆々の体、
肩まである銀色の髪を

したほぼ半裸の、おっさんだった。

「だけれが、化け物よ！！ どっからどう見ても可憐で美しい乙女
じゃないのよんっ」

「アホか！お前が乙女って、謝れ！全世界の乙女に謝れ！」

「そうだそうだ、それと体をクネクネさせるな。目が腐る！」

おっさんの乙女発言に切れた恵吾と一輝が直ぐに反論し叫んだ
けれど

「なぐんですって、揃いも揃って、言いたい放題言ってくれるわね
え。お仕置きしちゃうわよっ！」

凄まじい威圧感に、押されて反論できなくなった。 2人が黙
ったのを見ておっさんは満足そうに

「うふふっ、それで良いの。ワタシっておしゃべりは好きだけど、
今はおしゃべりしてる場合

じゃないのよね。実はあなた達にお願いしたい事があるの」

さっきので少し落ち着いて冷静になった、一輝が

「はあ？ お願い？」

そう言った。 恵吾は何となく展開が読めてきたが、一輝はこ
ういう状況になる小説は

あんまり読まないから話が見えずに、そう繰り返した。恵吾は状況的に察しはついていたので、とりあえず可能性を言ってみた。「それって、もしかして異世界に行つて魔王を倒すとか、異変を直して欲しい、とか？」

「あらん、物分かりが良いわねえ。その通りよ。実はワタシが管理してる世界で何だか、異変が起きてるの。それで原因が分からないのよ。」

おまけに干渉しようにも神様が下手に干渉しちゃうと余計に、ややこしい事に

なっちゃうから出来ないのよ。それで、あなた達に何とかして欲しくて、ここに

呼んだって訳よ。ちなみにその世界には魔法とかがあるのよ」

やはり当たりで、おっさんは

「だから、おっさんじゃ無いわよ」

「字の部分に突っ込み入れるな！」

「あら、そういうあなたも人の事言えないわよ」

「おい、俺を置いて2人で話しを進めるな!!」

・・・ゴホン、乙女（自称）の話しを聞き予想通りだったが、恵吾には疑問がある。

「何で俺達なんだよ。他の人間じゃ駄目のかよ」

「それはね・・・うふっ、ひ・み・つ」

うふふ、と笑いながらそんな風に言つて来た。

（いや、それは無いんじゃない？）

2人はそう思い一輝が何とか聞こうとしたが、

「おい、秘密って・・・」

「あゝら、乙女には色々と秘密があるものよ。男なら、その辺は察しなきゃ

ダメダメよん」

体をクネクネさせながらそう言った。

いくら聞いても無駄だと察したので、一輝にこれ以上聞いて

も無駄な事を身振りで伝えと、

呆れたように溜息をつき理解したと、返した。

「はあ、まあいいや。分かった、僕は協力するよ。正直言つて興味があるしね」

「・・・はあ、俺も協力してやる」

恵吾は言つたように興味があるし、こんな機会2度と無いだろうから、

了承した。一輝の方もある程度、諦めた、とでも言う様な状態で、
渋々だが了承した。

「うふふつ、あなた達なら、そう言ってくれるって信じてたわ。それじゃあ、私からの

プレゼントをあげるわ。あなた達に1つ『力』をあげるわ。

さあ、どんなのが良いの？」

それを聞き、恵吾は

「それじゃあ、僕はアニメや漫画、ゲームとかに出てくるキャラの
技や能力、

それに伴う體質を完全に使いこなせる状態で欲しい。これで良い
？」

一瞬で反応してお願いした。あまりに、早く言つたので、隣の
一輝は

「はやっ！？ もう決まつたのかよ」

そう言つた。

「あはは、実はもし、こんな事があつたらこれが良いなあって考え
てたんだ」

「・・・あつそう」

その発言に呆れた、というか少し疲れた感じで何か言いたげに、
反応した。

（うん、分かつてる。厨二病と言いたいんでしょう？まあ、何となく
自覚はしてるよ。

だから、そんな可哀想な人を見る目で見ないで、結構きついんだよ）

「んじゃ、俺はどうするか・・・」

「だったら、武器やアイテムを使えるっていうのは？」

武器系は一輝の方が詳しいから、というのもあり、そう言うで一輝は少し考えて、

「ああ、それは良いかもしれん。・・・んじゃそれで」

そう言うつてその能力にした。多分、頭の中にはさっきまで見たゲームの武器が

思い浮かんでいるのだろう。

「分かったわ。恵吾ちゃんが『技や能力を完全に使いこなせて、それに伴う体質の変化』

一輝ちゃんは『武器やアイテムを自由に出せて、その担い手であり使い手になる』ね。

それじゃあ、おまけで本来なら掛るマイナスは消しておくわね。

・・・はい、これで良いわ。

それと、何か他にお願いってある？『力』に関する事以外なら、叶えてあげるわよ」

そんなオマケであるとは、気前が良い、と恵吾は願いを告げる。

「それじゃあ、今までのマンガやアニメ、小説それと新しいのが出たらそれもあるようにして欲しい。そうじゃないと、これから、何か出た時に困るから」

「あゝ、確かにそうだよな。それじゃあ、俺もそれを」

これで、最新刊とかが出ても見れる、しかもタダで。と、思いもう1つの、そして、

ある意味最も大切な願い

「それと、もう1つ・・・僕がもと居た世界に初めから僕が居なかった、って事にして欲しい」

「はあっ！？ 何でそんな事・・・」

その願いに一輝は驚き、大声でそう言ったけれど

「そうしないと、家族が悲しむでしょ。だから、そうしてくれ」

これが恵吾の心残りな事だった。もし、行き成り行方不明になつたりしたら、家族は

悲しむだろうし、下手したら、それが原因で家族崩壊なんてなるんじゃないか、と色々と

不安で仕方がなかった。

(だから、この願いだけは譲れない)

「・・・分かったわ。恵吾ちゃん、あなたが家族思いなのね。嫌いじゃないわ、そういうの。わかったわ、そもそもワタシが原因だものね、

それはちゃんとしておくから、安心なさい」

微笑みながら、そう言った。

「それじゃあ、俺も同じようにしといてくれる?」

一輝も同じように真剣な眼差しで告げた。

「もちろん、良いわ。さて、それじゃあ、そろそろあなた達をあとちに送るわよ。準備は良い?」

「良いよ、速くしてくれ」

「おお、まっ、楽しむとするか」

2人は顔を見合わせ、頷いた。

「それじゃあ、いっくわよ、
バアアアアアーーーーー

ーッ!!!!」

「どわあ~~~~~っ」

その怒声と共に2人は上に飛ばされた。2人が飛ばされ完全に姿が見えなくなると

「ふう、行ったわね。神のワタシが言うのも何だけど、彼等の旅路に幸あらん事を」

そう呟いた。

飛ばされた2人と危険な神（後書き）

ここまで、読んで下さった皆様、ありがとうございます。

バトルシーンは今回は無く、プロローグ的な内容でしたが分かりにくい所があれば

教えて下さると嬉しいです。

それと2話以降では、その話で始めて出た、能力等をここに書いていきます。

とばされた世界と、チート能力

「う、うゝん。ここは・・・森？何で僕こんな所に居るんだ？」

恵吾は目が覚める前の事を思い出そうとした。

「えっと、確か一輝の家で遊んで、帰ろうとしたんだよな。」

それで・・・って、思い出した。確か神に異世界に行つて欲しいって言われて飛ばされたんだっけ・・・」

周りを見渡すと木、木、木、木と草と花しかない。状況的に、どこかの森である。

面倒な事になったな。そう考えていた。

（まあ、勇者として召喚されなかったって事は、この世界には、そういうシステムが

無いって事なのか　な？まあ、何にしても今の状態じゃ情報が少なすぎる）

考えてはみてるが、どれも、ただの推測であり、決定的なモノは何も無い。

「さてと、これからどうする？　一、輝・・・あれ？一輝、おゝい一輝、どこいった？」

暫く探してみるが何処にもいない。という事は別の場所に到着したって事か・・・

どうしようか・・・。　そう考えていると

バサッ、バサッ、

（ん？何の音だ？）

キョロキョロ

周りには何も居ないし、草木も揺れて無いな。それならば何処から・・・

まさか！？　　そう思い上を確認してみると

「ギヤアアアーーーーッ」

目測でも全長が20Mはある鳥が事が頭上を滑空していた。でっかいなあゝ、

やっぱ異世界って違うな。と関心してたら、そのまま降下してきた。

「ウソーーーーッ！ 食われるーーーーッ」

恵吾は直ぐに走り出した。森の中に完全に入ってしまったえば見失うだろう、

そう思って走り出したが・・・未だに追って来ている。普通は見失うだろ！

そんな突っ込みも虚しく鳥は無情にも追ってきた。

「ゼーハア、ゲボツ、ハアハア。も、もう駄目、限界・・・」

元々体力なんて無い上に木の根で足場の悪い道を数百M走れた、これだけでも

凄いのこれ以上は、もう無理っばい。どうするれば・・・、と考えていたが、

「いかん！忘れてた。今の僕には力があつた。となれば」

恵吾は鳥の方を向き右手を構えて

「喰らえ、『ザケル』*1」

そう叫ぶと、右手から青白い電撃が放たれた。

「グギーーーーッ」

鳥は叫び、苦しみ高度を落とし地面に落ちた。しかし、すぐに態勢を立て直すと

再び、空に上がった。それを見て

「威力を落とすぎたか・・・なら、『テオ・ザケル』*2」

先程よりも大きな電撃が放たれ、またも鳥に直撃した。

「グギヤアー————ア」

鳥は再び落ちて今度は動かなくなった。

「あゝ、ビックリした。焦って力の事を忘れるなんて、我ながら情けないな……」

それにしても、本当に出来たよ。凄い、何か感動する」

1人で余韻に浸りそう思っていたが、とりあえず、目の前にあるこれを如何にか

しなければならぬ。このまま放置しておけば迷惑になるだろうから……」

「というか、ついつい倒しちゃったけど良かったのか？もしかして、絶滅に瀕している生き物だったり、神聖な生き物とかだったらシャレにならないな」

今更ながら自分の行った事が危険な行為だったのではないか、と思ひ慌てだした。

「とりあえず、証拠隠滅しとくか、えっと、モノを仕舞うには、よしこれで良いか『月衣』*3これに入れておくか。んじゃ『力』*4ヨイショっと。」

うお、凄い。簡単に持ち上がるし、重さを対して感じない」

テンションが上がり騒ぎながらも鳥を持ち上げ、それを体に近付けると、

先端から消えていく。正確には『月衣』内に仕舞いったのだ。そして、これからの事

について考えた。とりあえず、近くの村にでも行って、情報を集めるのが良いと

判断し、村を探すことにした。となれば、やっぱり空から探すのが1番手つとり速いと

考え、空を飛ぶ技を思い浮かべると、上昇していった。

「『舞空術』*5ってやつぱり便利だなゝあ。さてと、村はどこだ？」

そのまま、暫く上空を飛びまわっていると、煙が見えた。さらに、その方を

よく見ると、家等が幾つか見えた。おそらく、村だろうと思った。「それじゃあ、このまま近くまで行つてそこから歩いていけばいいか」

そう言い、そのまま近くまで飛んで行つたが途中で異変に気付いた。煙は登っていた、

しかしそれは、沢山の家が燃えていたのだ。

「これって、冗談だろ」

そう言い、恵吾は速度を上げ村に行つた。

「よし、お前らはあつちから行つて、奴らを追い詰める」

「……へいっ」「……」

村は所々で火の手が上がり何にももの悲鳴も聞こえる。そこで1人の男が何人かの

人間に支持を出していた。その男は他の人間とは違い、汚れてはいるが鎧を着ている等、

他とは違っている。今、村を襲っている盗賊達のボスの命令で手下達と共に

村を襲っているのだ。

「これで、ボスも文句もねえだろう。最近、奴らの取り立てが頻繁になつてゐるって

愚痴をこぼしてたからな。全く、だからって俺たちに当たるこたあねえのによ」

「はあはあ、走れ！早くしないと奴らに追いつかれるぞ」

男がそう言い妻と共に自分の子である小さな男の子と女の子を抱えながら

走っていた。

「お父さん……」

男に抱きかかえられている男の子は不安そうに聞いたが、男は微笑み

「大丈夫だよ。お父さんが守ってあげるから」

そう言っ、子供達を安心させようとした。しかし

「おっと、逃がさねえよっ」

前から1人、後ろから2人

「お前ら全員、大人しくしろよ。そうすれば命は助けてやる」

「いつひひ、そうそう、さっさと捕まりな」

3人に囲まれ、さらに周りは燃えていたり、家が崩れている等で逃げ場は無くなった。

（こうなったら妻と子供達だけでも……）

「お前達は逃げろ！ うおおー……」

男は前に居る1人に向かって突っ込んだ。1人だけなら、時間稼ぎ位はできる。

それに上手くいけば倒せるかもしれない。そう思い行動した。しかし

「へっ、馬鹿な奴だ。1人ならどうにかなるとでも思ったか？」

焼きはられえ ブラン」

そう唱えると、掌から掌大の炎が放たれた。

「ぐあっ、くっ、魔法士、か」

その炎が体に直撃し、当たった部分はかなり酷い火傷になった。

「その通り。 ホント、馬鹿な奴だ。まあいい見せしめにお前を殺すとするか」

そう言い動けない男に近付き、剣を出し振り被った。

「止めてっ、あなたー」

必死の叫びも虚しく盗賊は

「はっ、死ねえーっ」

剣を振り被った。男は、もう駄目かと諦め目を瞑った。そして・

「がはっ……」

「え？何で……」

目を開いてみると、斬られておらず、先程まで自分に斬りかかるうとしていた

盗賊が引っくり返っていた。そして、自分の前には1りの青年が居た。

「ふう、間に合ったかな？大丈夫、じゃないですね。『ウリプス』

*6」

そう言い手を翳すと、体の周りが光、火傷を含めた全ての怪我が治っていた。

突然の事に訳が分からず、

「け、怪我が治った。き、君は一体……」

「えっと、僕は恵吾って言います……」

恵吾は『舞空術』空から来た時、偶然この現場を見付け上空からドロップキックを

したのだ。恵吾が自己紹介をしていると蹴られた男が立ち上がり「て、手前いきなり何しやがる。痛えじゃねえか」

そう叫んだ。それにより、茫然としていた残りの2人もハッとした。

「……はあ、取り合えずこいつらをぶっ飛ばしてから説明します」そう言っ目の中の盗賊を睨みつけた。

（正直に言っと、恐い。当然でしょ。元居たせかいでは、こんな経験したこと無くて

精々、組手か、たまゝにする喧嘩位しか無いんだぞ。ハッキリ言っ

て、

ちょっと震えてるんだぞ)

「ふざけんなつ。1回不意打ちが成功したからって良い気になってんじゃねえ！」

「焼き払え ブラン」

そう言つて、盗賊の奴は炎を放ってきた。半ばヤケクソ気味に左手を前に出した。

「うおおー」

そいつの炎は左手に吸収された。

「う、嘘だろ。魔法が効かねえ」

(あいつからは、そういう風に見えたのか……。まあ、いいか。いくぞ！)

「効かないんじゃない。吸収したんだ。喰らえ『第4波動』*7」

右手を突きだすと同時に叫ぶと、右手から炎が一直線に放たれた。

「・・・へっ？」

それは盗賊のすぐ横を通り上空に消えていった。あれ？ 外したか。やっぱりまだ

上手く使えないな。能力自体は上手くいっても当てられなかったら意味無いしな。

「な、何なんだテメーツ！ お、おいつ、お前ら何ぼさつとしてんだ。

3人掛かりで一氣にヤルぞ」

「あ、ああ」

そう言つて剣を抜いて3人で前と後ろから斬りかかって来た。

「なら、ふー、『流水制空圏』*8」

敵の剣を全てほんの僅かな動きで回避した。

「『D・F・H』*9」
ディードライブ・フォックス・ハウンド

叫ぶと同時に3人は吹き飛んだ。一瞬の出来事に周りに居た。家族はもちろん、

吹き飛ばされた当の本人達でさえ何が起こったのか気付けなかつ

たようだ。

「さて、改めて、そちらの人達は怪我とかしてないですか？」

「え、ええ。お陰さまで」

「そうですか、良かった。それにしても酷い有様だ。盗賊に襲われている

みたいですけど・・・」

「え、ええ。そうなんです。あいつら少し前に行き成り襲ってきて、何人が戦おうと

したんですが、何せ盗賊達は数が多く、手に負えませんでした。そして、その後、

私達は村の皆は直ぐに逃げようとしたのですが・・・」

「・・・それじゃあ、他の人達は？」

「既に捕まってしまった人達も居ますが、逃げ延びた人達も居ると思います。

その人達はおそらく、村長の家でしょう。あそこには避難用の地下室が

ありますので・・・」

それを聞き、怪我人が居る可能性も考え、恵吾は同行する事にしました。

恵吾のお人好しな性格もあり、このまま見て見ぬフリも出来ないしと判断し、

「成る程、だったら他の盗賊達が来る前にそこに行きましょう」

恵吾ががそう言つと、少し驚いた様だったが、

「え、ええ。分かりました、こっちです」

そう言つて案内してくれた。

その後、どうにか他の盗賊達には会わなかった。盗賊達が居たのは村の端の方だけで

村の奥には、まだ侵入して来て居ないようで火は放たれていないし、

物も壊れていなかった。目的地である村長の家に着いた。他の家よりも大きかった。

「ここです。ほらおいで」

父親は子供達をそう言っただけで促していた。

「誰じゃ?!」

家の中にあつた隠し扉を開けて下に進むと、地下室があつた。中は薄暗く、ランプの

光がチラホラあるだけだ。そこには、老若男女が何人か居たけど怪我をしている人が

何人も居る。皆、暗く空気もとても重かった。その中に居た、髭を生やした老人が

こちらに気付いて近付いてきた。

「村長、安心して下さい私です」

「おお、君か。良かった無事じゃったんじやな」

どうやら、その老人が村長のようで、男がそう言っただけで安心したみたいだ。

「ええ、何とか。それより他の人達は・・・」

男が地下室を確認しながらそう言った。やはり人数が少ないから、恵吾は

もしかして、と思ったが、やっぱりかなりの数が居ないみたいだ。

「ああ、奴らが襲ってきた時、近くに居る者達は逃げ込めたんじやが・・・」

遠くに居た者達は・・・。それに、ここに居る者達も怪我をしている

者がある・・・」

「・・・」

村長がそう言うと、男は俯いてしまった。しかしそれも、当然だと思えた。

同じ村の人達が何人も居ない、おまけに怪我人も沢山いる。辛い状況だろう・・・。

「ん？ そこにおけるのは・・・、っ！？ 何者じゃ？」

恵吾に気付いた村長さんは、見た事が無い顔だった事から恵吾に向かつてそう言った。

だが当然の反応だ、見た事無い人がここに入ってきたのだから、怪しんでも仕方ない。

しかしそれによって、同時に空気が一気に張り詰めたものになってしまった。

どうするか考えていると・・・

「ま、待って下さい。彼は盗賊に襲われていた時に助けてくれたんです。

敵ではありません」

警戒を解くにはどうしたら良いか考えていると、そう言い恵吾を庇ったけど、

中に居た人達は恵吾に対して疑いの目で見ていて、信今にも飛び掛かって来そうだった。

「・・・しかし、状況が状況じゃ。そう簡単には信じられん」

確かに村長という立場上、いや、そういうのを関係無しにしてもそう簡単に

信じれなであろう。なら、こういう場合はどうするべきか考えていると、奥に居る

怪我人達が目に入った。

「なら、これならどうですか？『ラリプス』*10」

地下室全体が光りに満ちて、それが収まると地下室に居た人達の怪我が治っていた。

「け、怪我が治った。魔法士？」

「ええ、これで信じてもらえますか？」

恵吾がそう言うとなんか戸惑っていた。やっぱり治療をしたぐらいじゃ駄目かな？

そう思っていると村長が僕に近付いてきて

「……うむ、信じよう。疑ってすまなかった。それと、皆の怪我を治して頂き

感謝します」

それを聞き、恵吾は少し驚いた。信じて貰う為にやったのだから、信じて貰えたのは

嬉しい。しかし、感謝までされるとは思っていなかった。それでも信じて貰えた事が

嬉しく、安心したが周りに居た若者、数人は文句があるようで

「村長、怪我を直したぐらいで、信じては……」

「大丈夫じゃ。これでも長く生きて色々な人を見て来た。この若者に悪意はない」

その一言で、納得していなかった人達も渋々だが納得したみたいだ。それに、

周りの空気も少し軽くなった。

「それじゃあ、これからの話をしましょうか」

恵吾がそう言うと皆は真剣な表情になって恵吾の方を向いた。

とばされた世界と、チート能力（後書き）

第2話更新完了です。

やはり、物語を作るのは難しく村人達との会話が難しいです。
戦闘に関しても、恵吾の一方的な攻撃で終わってしまいました。
これからは、もう少し上手くなれるようにしていきますので、よろしく願います。

解説です。見方としては

技名 使ったキャラ 登場作品

簡単な解説

という感じです。

*1『ザケル』 ガツシュ ゼオン 「金色のガツシュベル」

手、又は口から電撃を出す術です。 手からの場合は青白く、口からの場合は

黄色です。 込めた魔力にもよるので、はつきりと言えませんが、
威力的には

あまり強くありません。

*2『テオ・ザケル』 ガツシュ ゼオン 「金色のガツシュベル」
早い話が『ザケル』の強化版といった感じです。ただ、同じ魔力
を込めた

時にこちらの方が燃費が良いといった感じです。

*3『月衣』（かぐや） ウィザード 「ナイトウィザード」

この話では、物を収納する能力しか出ませんでした。が原作では世界結界の影響を受けずに活動できるようになる。というのが重要です。

＊4 『力』（パワー） 未央 ブレイド アークライト 「NEEDLESS」

読んだ、そのままの能力です。これは自身の身体構造を遥かに超越した力を

発揮することができるようになります。

＊5 『舞空術』 気、もしくは魔力を使える一部のキャラ 「ドラゴンボールシリーズ ネギま！」

気、もしくは魔力を使う事で、空を飛ぶ事が出来るようになる。

＊6 『ウリプス』 呪癒士 「hack G.U.」
1人を対象に治癒する魔法。

＊7 『第4波動』 左天 「NEEDLESS」
炎や周囲の熱エネルギーを吸収し、それを炎として放出する能力。威力は吸収した熱エネルギーに比例し、高い熱であればあるほど威力が増す。

＊8 『流水制空圏』 白浜兼一 風林寺隼人 「史上最強の弟子ケンイチ」

体の表面薄皮1枚分に強く濃く気を張り、相手の動きを流れて読み取り攻撃の軌道予測、最小限の動きで攻撃をかわす。ただ、本編では動きのみを読み取っただけである。

＊9 『D・F・H』（ディーンドライブ・フォックス・ハウンド）
セツナ ブレイ ド アークライト 「NEEDLESS」

マッハ2の速度で敵を攻撃する技。これは『速』（スピード）の能力の応用であるので速度を変えると他の技になる。

*10『ラウリプス』 呪癒士「・hack G・U・」
ウリプスが単体に対して発動するが、これは全体に掛かる魔法である。

救出と瞬殺

「さてと、これからどうしますか？」

僕の方を見ている人達にそう聞くと、若い人達が

「どうするって、決まってるだろ。捕まった皆を助けに行くんだ！」

「でもよ、助けるって言ったって、皆がどこに居るか分からないのに、

どうやって助けるんだよ」

「それに、もし盗賊達に見付かったら、どうするんだよ」

ある者は助けようと、またある者は恐がり、口々に言った。暫く言い合っているが、中々決まらなかった。そうしていると

「・・・落ち着かんか！」

皆に向かって村長が一喝した。それにより、騒いでいた人達も静かに

なった。

「しかし、早くしないと皆が・・・」

「じゃから、落ち着けと言っておるのだ。何の策も無しに、ただ闇雲に

突っ込むだけでは、何の解決にもならんじゃろ。・・・それに、皆がどこに居るか分からなければ、ただ捕まりに行くようなものじゃ・・・

」

そう言われ、いきり立っていた人達は、黙ってしまった。外の子か、

なら大丈夫だな。その事を伝えないとな。

「・・・あの、外の様子なら調べる事が出来ますよ」

そう言つと、即座に皆が反応した。

「「「本当か!?!」」」

「!っ、は、はい。少し待って下さい。『白眼』*1」

皆の声が割と大きくて、驚いてしまったが、すぐに落ち着き発動した。

発動と同時に視界が広がり、壁を抜けて地上が見えた。

（うわっ、初めてだとこれキツイな。少し、気分が悪くなったかも・・・。ううゝ、我慢我慢。えっと、村の人達は何処なんだ・・・。）

捕まった人達は見つかった。

「・・・見付けました。捕まった人達は、この家の正面から見て右側、村の

入口付近に集められています」

そう言つと、村長さんが少し考えていると、周りに居た人が口を開いた。

「・・・おそらく、そこからアジトに連れて行くんだろう。

そうだ！怪我してる人は居ないか？」

そう言われ、確認してみると大人が何人か怪我をしているが酷い怪我を

している人は居なかったし女性や子供は怪我をしていなかった。

「大人の人が何人か怪我をしてるけど、皆軽傷です。他の人は、怯えては

いますけど怪我はしていません」

「それで、盗賊達はどうか？」

そう聞かれて

「見張りが10人、少し離れた所に15人、村全体に20人ですね」

『白眼』を使い分かった人数と場所を伝えた。

「・・・凄いな。そんな事まで分かるなんて、君はもしかして名の知れた魔法士なのかい？」

へたに答えるとボ口が出てしまので、余計な事は言わない為

「まさか、まあ、色々と事情があるから詳しくは言えないけど・・・

「そうやって適当に誤魔化すと、納得はしてないが何となく察した

のか

それ以上は何も聞いてこなかった。

話していると、奥に居た他の男が

「なあ、それでどうやって助けるんだ？」

「僕が、見張りの盗賊達を倒すから、皆さんは捕まっている人達と一緒に安全な場所に避難して下さい」

聞いてきたから僕がそう言つと、驚き言つた。

「ちよつと待て。いくらお前が強いっていつても1人であいつらと正面から戦うのは無茶だろ！」

確かに普通はそう思うだろう。だが、恵吾にはどうにかする技に幾つか心当たりがあるから問題ない。

「大丈夫ですよ。正面から、何て無茶はしませんよ。こつそり近付いて不意打ちで倒しますから」

それを聞いて、1人の人が

「・・・そんな魔法まで使えるなんて、あんたもしかして、創形術師なのか？」

（？何だそれ、聞いた事が無い・・・って当り前か）

「創形術師？」

「あれ、違うのか？聞いた事無い魔法だから、てつきりあんたが作った魔法かとおもったんだけど」

恵吾が繰り返すと聞いてきた人が、少し意外そうに言つたので、その言葉の意味から予測して

「・・・もしかして、自分で新しい魔法を作る人の事ですか？」

そう言つと、当たつていたようで、

「ああ。俺って昔、魔法士なりたくて勉強してたんだけど、その時に自分で新しい魔法を作る人が居て、それが創形術師だって・・・」
予想は当たっていたようで、話を合わせておく事にした。

「・・・成る程、だったら僕は創形術師ですよ。ははっ、すみません。僕が住んで居た所とは呼び方が違うから、分かりませんでした」
そう誤魔化すと、納得したようで何も言わなくなった。

そろそろ、本題に入ろうと思い、

「それじゃあ、助けに行く人は誰にします？」

そう聞くと、男の人達全員が立ち上がり皆、自分が行くと
言いだし、遂には全員で行くと言いだした。

恵吾は、慌てて言った。

「待って下さい。いくらなんでも、そんなにも大勢で行ったら、見
付かりますよ。数人で行った方が良いでしょう」

「うむ、ならば、一緒に行く者は……」

そう言い、村長は何人かを選んだ。

「それじゃあ、行つてきます」

「気を付けて下さいね」「皆をよろしくお願いします」
残った人達は恵吾達に励ましを言いながら見送った。

外に出ると、早歩きで進んで行った。外のすぐ近くは、まだ壊れ
たりしておらず、一見すると人が道に 居ないだけで平和に見える。
しかし、少し遠くを見ると火の手が上がっている家もあり、それが
平和で は無い事を示している。

「ちよつと止まって下さい。この先に盗賊が1人居ます」

暫く『白眼』を使いながら進んでいると、盗賊が1人僕達の
進行方向に居る事が分かった。

「1人ぐらいなら、皆で行けば倒せるぜ」

村の人はそう言うが、最悪の場合も想定して

「駄目ですよ。もし、仲間を呼ばれたらお終いです。ちよつと待っ
てて下さい」

そう言い『ぬらりひよんの能力』*2を発動し、行動に移した。
「き、消えた」「すげー」

傍に居た人達には僕が急に消えたように見えて
驚きの声を出した。

「ちつ、あいつら何処に行きやがった。まった、く……」
盗賊は村人達が中々見付からない事に苛立ちを感じブツブツ呟いていた。

その時

「んがっ！」

そう言い、気を失った。

「これで良し、と。ついでに」

能力を解いた恵吾は、両手を合わせ地面に手を当てた。*3
すると、手元の地面が少し動き、それが伸びて巻き付き
盗賊を拘束した。

「ふゝ、これで、もし起きても、声も出せないし動けないだろう」
体だけでなく口も押さえ、身動きを封じた。

「皆さん、良いですよ」

待つていた人達を呼び先に進んだ。

「それじゃあ、ちょっと待ってて下さい」

恵吾達は他の人達が捕まっている場所に着くと、

恵吾が再び姿を消し、盗賊達に近付き気絶させた。

「ぎっ！」 「があっ」 「ほげっ」

盗賊達は2、3人やられて異変に気付いたが、何も出来ない
まま気絶させられた。

「な、何だ。 こいつら、勝手に倒れたぞ……」

村の人達は突然、目の前で倒れていった事に驚き戸惑っていた。

恵吾が姿を現すと、驚き

「うわっ、何だお前、どっから出て来た」

そう叫んだ。恵吾は近付いて縛っているロープを斬りながら

「大丈夫ですよ、僕は皆さんを助けに来たんです」

そう言うが、戸惑っていた。

「は？あ、あんた何言って……」

その時、待っていた人達が駆け寄り、ロープを斬り始めた。

「おい、大丈夫か」

「え、ああ、皆大した怪我はしてない。それより、どうしてここに・
・・」

どうやら顔見知りのようで、戸惑いながらも安心したようで
そう聞いていたが、

「説明は後だ。それより早く逃げるぞ」

そう言つて、皆と逃げようとした。だが、足を怪我している
人も居て少し手間取っていた。それを見て

「あつ、その前に『ラリプス』」

回復の呪文を唱えると、全員の怪我が治った。

「すげえ、怪我が治っちゃった。さっきのといい、あんた一体何
者なんだ？」

「それは、っ！ 不味い、盗賊達は何人がこつちに来てる。このま
まだと、鉢合わせする事になる」

逃げながら説明する、と言おうとしたが『白眼』で此処に何人が
近付いて来ているのが分かり伝えた。

「「「「「！？」」「」「」」

（まずいな、このままじゃどうしたって会う事になる……。な
ら、囿になるか）

「聞いて下さい。これから僕が奴らを引き付けるので、その隙に逃
げて下さい。大丈夫、ちゃんと盗賊達とは会わない道順を教えます
ので、その通りに進んで下さい」

それを聞き、皆は動揺するが、一緒に来ていた人達が
説得して先に行く事になった。

村の人達が行ったのを確認して

「皆、行ったか……。なら、精一杯暴れないとね」

ニヤリとなり、上空に向かって

「『火竜の咆哮』*4」

空に向かつて放つと、大きな火柱のようになった。

それを見て、近くに居た盗賊達は慌てて、叫んでいた。

「な、何だあれ」「あれって確か村人共が居る場所じゃあ・・・」

そして、此処に來ると1人だけしか居らず、他の村人は1人たりとも

居なかった。それを見た盗賊は

「おいっ！てめえ、此処に居た奴らはどうした？！」

聞かれたところで素直に答える訳無く、挑発の意味も含め

「さあ、知らないな。それに例え知っていたとしても、お前達に言う訳無いだろ」

（ああ、何だか、ちょっと感動・・・分かつてる。厨二病つて言いたいんだろう？）

自分で言つて少しショックを受けたりしていると

「てめえ、ふざけるんじゃないやねえーっ」

そう叫びながら突っ込んできた。

恵吾は両手で構え

「『ゴムゴムのガトリング』*5」

「どわあー」

放つと、全員が連打を受け吹っ飛ばされ瞬殺された。何人かはギリギリ気を失わなかったが、それでも満身創痍で、動けなかった。

「う、腕が伸びやがった・・・」

「ば、化け物だ」

そう口々にいうが、

「失礼な、僕はちゃんとした人間だ。・・・まあ、色々とチートな能力は持つてるけどね。それにしても、僕って単純だな。テンションが上がっただけで怖いとか、そういうのが感じなくなったんだから・・・」

そう言って、改めて自分の単純な脳細胞を嘆いていたが
「さてと、ついでに他の奴らも倒しておくか・・・」
気を取り直して、その為に行動を始めた。

救出と瞬殺（後書き）

今回は、村人たちの救出と雑魚を倒すというのでした。WWW
この辺の敵はチュートリアルみたなもので、割と
簡単に片付けています。

強い敵は、今後もう少し話が進んでから、という事になります。

技紹介です。

*1 『白眼』 日向一族 「NARUTO」

ほぼ全方位を見渡す事が出来、また物体の透過も可能。

*2 『ぬらりひよんの能力』 ぬらりひよん リクオ 「ぬら
りひよんの孫」

今回使ったのはそこに居ても認識されない、又は当たり前と思う、
という、

ぬらりひよん自体の能力であって鬼撥では無い。

*3 『両手を合わせ』 エド アル等 真理を見た者 「鋼の錬
金術師」

本来なら錬成陣が必要だが、真理を見た場合は両手を合わせるだ
けで発動出来る。この物語では発動した時に材質の理解も行える。

*4 『火竜の咆哮』 ナツ 「FAIRY TAIL」
口から灼熱の炎のブレスを放つ。

*5 『ゴムゴムのガトリング』 ルフィー 「ONE PIECE」
両手を伸ばし、相手に連打を叩き込む。

戦いの終わりと騎士の到着

敵は、村全体に居ると、付近に居るの。合わせて約30人程度か。

1人ずつ倒すのも良いが、それでは時間が掛りすぎてしまう。それに、

既に10人程がすぐ近くまで来ているのだから、全員まとめて倒した方が

効率が良い、と考えた。いや、それよりも、どの技を使おうかとワクワクも

していた。本当に単細胞である。

少し離れた所に盗賊達は居た

「おい、見たか、あの火柱」

「ああ、俺達の中にあんなの使える奴はいねえ」

「村の奴か、もしくは・・・」

「何にしても、邪魔する奴は、ぶっ殺す」

そう言い、火柱の元に向かった。

「へへっ、見付けたぜ」

盗賊達は既に来ていたのも合わせて10人になる。

「あんな所に立って、狙ってくれて言うてるようなもんだぜ」

「馬鹿か、お前ら。あそこには村の奴らが居たんだぞ。それと、それを

見張ってる奴らも居た。なのに、どこにも見えねえ、つまり・・・」

「全員、奴にやられちゃったって事か？」

「ああ、そうだ。良いか、油断するなよ？あいつを囲んで、

こいつをぶち込むんだ」

そう言い、弓矢や銃を見せた。

盗賊達はそれを見て頷き散っていった。

その後、素早く移動して行き半円状に囲んだ。

そして、準備が整うと

「今だ、撃てえーっ！」

盗賊達が分かれて全員で半円状に囲んで、攻撃しようとしているのは

『白眼』の力によって既に恵吾にバレていた。なので、盗賊達が弓や、銃、魔法で攻撃してきた瞬間に『舞空術』で空に飛んで回避したのだ。

そして、上空から様子を確認すると指示を出していた男の場所を確認した。

盗賊達は家と家の間に居た。

「よしっ、んじゃ行くか」

そう言い、指示をしていた男に向かって急降下し

「『つばめがえし』*1」

「がはっ・・・」

鋭い1撃で気絶させた。

「『戦いの歌』*2 喰らえ、『破裏剣舞』*3」

「くそっ、何なんだお前は！」

1人を気絶させるとすぐに、一緒に居た2人を待っている間に『鍊金術』で作った双剣で斬った。斬ったと言っても刃は潰したので実質は斬撃では無く、ただの打撃になった。

家の間から出ると、すぐ横から同じように1人出て来たので

「『疾風双刃』*4」

双剣の連続切りを繰り返して倒した。

そしたら、次は右側の少し離れた所から2人出て来た。

恵吾はそちらを確認すると

「『プラクテ ビギ・ナル 光の精霊11柱 集い来りて 敵を撃て 魔法の射手』*5」

呪文を唱え魔法を放つと全弾が命中し、

「ぎゃあああーーーーー」

盗賊達は叫ぶと、気を失った。

今度は、反対側から2人出て来た。

背中を見せている恵吾に、チャンスとばかりに

魔法を撃って来た。

「ふざけやがって、「斬り裂け ウェンル」

「砕け グード」」

風の刃と30cmほどの岩の塊が飛んできた。

しかし、それに対して冷静に

「『破道の四 白雷』*6」

「『どわーーーーっ』」

魔法ごと、敵を吹っ飛ばした。

「『ダイバイン・バスター』*7」

次に奥から、銃で狙っていた男に放った。男は何も出来ないまま気を失った。

そして、最後の男を探すと、どうやら逃げた様だ。おそらく他の仲間達を

呼んできて、さっき以上の数で倒そうとしているんだろう。

そう考えるも、そいつの事は無視した。

とりあえず、ここに居る奴らを縛って動けないようにする為

パンツ

『鍊金術』を使い地面の土を使い、縛り上げた。

（鍊金術って本当に便利だな。エネルギー保存の法則に従えば、これだけで簡単に出来るんだからな。よし、出来た。後は、これを、
っとこれでいいだろ）

気絶している盗賊達を全員縛り上げ、近くの倉庫に入れておいた。

そして、逃げた盗賊を含め残りの奴らを倒す事にした。

「んだと、そんな馬鹿な・・・」

「だけど、マジだ。実際にこの目で見たんだ。見た目はただのガキだけど、とんでもねえ強さだった」

「・・・とりあえず、一旦戻ってこの事を伝えねえと」

「ああ、急ぐぜ」

逃げた男は途中仲間に出会い、先程自分が見た光景を伝えた。初めは信じようとしなかったが、あまりにも必死に言うので嘘では無いと感じ、信じた。

そして、一緒に戻ろうとしていた、その時

「そうはさせない。悪いけど、此处で倒す」

追いついた恵吾がそう言う

「げっ、もう来やがった」

すぐに走って逃げようとしたが、足に魔力を込め、地面を蹴った。

* 8

そして、1番前に居た男の腹に両手の指先を当て

「小さく前ならえ、『無拍子』* 9」

拳を叩き込んだ。

「がふっ」

そして、残りの盗賊達に

「『渦廻斬輪蹴』* 10」

「『ぎゃああーっ』」

一気に当てると、ボロボロになり倒れた。

「ん？ これは・・・あいつら逃げたのか」

残りの敵の位置を知ろうとしたが、村に散っていた盗賊達は既に盗賊達は居なかった。恵吾は今、倒した奴らを縛り上げて、同じように倉庫に入れた。

「奴らを追い払ったのか？」

村の人は驚きそう聞いてきた。

「ええ、何人かは捕まえたのですが・・・すみません」

恵吾がそう言い謝ると

「何を言ってるんだ。あいつらを追っ払ってくれただけでも充分だぜ。なあ、皆！」

皆はそれに答え口々にお礼を言った。

恵吾は嬉しかった、だが、同時に不安があつた。それは

「でも、もしも、また奴らが襲ってきたら・・・」

今日以上に危険になる、そう言おうとしたら

「そ、村長。今、村の入口に国の騎士達が・・・」

入口付近まで様子を見に行っていた人が戻って来た。

恵吾達はそれを聞き顔を見合わせた。

入口付近に着くと、そこには甲冑や剣で装備した人達が揃っていた。

その中でも、他の騎士よりも立派な装備をした人が寄って来た。

「あなたが、この村の村長ですね？我々は王国の騎士団の者です。

私は隊長のマダス・アンダルトと言います。最近、この辺りで盗賊達が出没するとの情報を得てこちらに来たのですが・・・間に合いませんでした。申し訳ない」

そう、申し訳なさそうに言った。

「お気になさらず。偶然、立ち寄った彼のお陰で、皆、無事でしたから」

村長さんは、別段気にしていない、といった感じで言い僕を紹介した。

「君は？」

騎士の人は恵吾の方を向き聞いてきた。

「僕は端山 恵吾と言います」

「そうか、ケイゴ君、君のお陰で村の人達に大した怪我が無かった。ありがとう」

「いえ、そういえば盗賊達はどうするんですか？」

先程から気になっていた事を聞いてみた。

「君が捕まえてくれた奴らは牢獄行きだ。逃げた奴らや、残りの奴らはアジトが分かり次第に捕まえるよ。それと、奴らがこの村を再び襲う可能性もあるから、ある程度の部隊は残しておくさ。ところで君はこれからどうするんだい？」

マダスは恵吾が聞いた事の他に聞きたかった事まで教えてくれた。
(どこか……。うーん、取り合えず一輝やこの世界の情報を集めたいし、大きな街、交通の便がある所に行くか……)

「実は友達と逸れてしまって、出来れば大きな街に行こうと思っています」

それを聞くと、丁度良いとばかりに

「なら僕達と来るかい？僕達は報告の為に城に戻るんだが、良かったら一緒に来ないかい？城下町なら大きいし君のお友達の事も何か分かるかもしれないよ」

城下町か、それを聞き、そこなら情報も多く、大抵の場所に行ける、

という点から付いて行く事にした。

「それなら、お願い出来ますか？」

「もちろん。それじゃあ、明日の朝に出発するから準備しておいてくれ」

そう言われたが、ケイゴは荷物等は持っていないのでこのままなのだが。

「分かりました。それじゃあ、明日よろしく願います」

恵吾がマダスさんと話し終えたと村長さんが

「なら今日は儂の家に泊りなさい」
そう言った。

「良いんですか？村長さんも大変なんじゃ・・・」
と言ったが正直ありがたい話だった。この世界には来ただけ
お金などは持って無かったので嬉しい申し出だ。
例え野宿になったとしても大丈夫だろうが、やはり
しつかりとした家で休みたかった。

「いや、構わんよ。君のお陰で皆が無事じゃったんじゃ。むしろ、
これ位じゃ全然足りんよ」

「それでは、お言葉に甘えさせて頂きます。よろしくお願いします」

「さあ、中に入ってくれ」

再び村長さんの自宅に着くと、そう言って促した。

「おじゃまします」

「あつ、お帰りなさい、お父さん」

「おじいちゃん、お帰り」

家に入ると女のひと、小さな女の子が気付いた。

「ああ、ただいま。今日はお客さんも居るぞ」

「あら、あなたは・・・」

そう言つと、女の人は僕が居る事に気付いた。

「昼間のお礼も兼ねて、今日は我が家に泊ってもらう事にした」

「お世話を掛けます。1晩よろしくお願いします」

「あら、そんなこと無いわ。あなたが居なかったら今頃どうなっ
たか」

そう言われ、嬉しくなった。僕が照れていると女の子が

恵吾の足元に来て、服の裾を軽く引つ張つて、

「お兄ちゃんが悪い人達を追ひ払ってくれたんでしょ？ありがとう」
お礼を言った。恵吾は、嬉しくなり

「どういたしまして。お嬢ちゃん、お名前は？」
そう聞くと

「あのね、私、ディナって言うの。お兄ちゃんのお名前は？」

「僕の名前は恵吾っていうの。よろしくね。」

僕が答えると女の子は微笑んだ。

「ケイゴお兄ちゃん、こっちに來て一緒にご飯食べよ」

「え、えっと・・・」

「こら、そんなに引つ張ったら、ご迷惑でしょ」

恵吾は苦笑するが

「気にしないで下さい。子供は割と好きですから」

「ほら、ケイゴおにいちゃんも、おじいちゃんも早く」

そう話していると、ディナに引つ張られて食卓に連れて行かれた。

「さっ、どうぞ。お口に合えば良いんですけど」

「お母さんのご飯はすごくおいしいんだよ」

見たこと無い料理ばかりだったが、食べてみると
どれもおいしかった。

「おいしです。この料理初めて食べたんですけど、すごくおいしい
です」

そう言われ嬉しそうに言っていた。

「あら、お口に合って良かったわ」

それを村長さんは見ながら微笑み、話し掛けて來た。

「明日には此処を出るんだろう？なら、今日の内に沢山食べておき
なさい」

「えー、お兄ちゃん、明日には居なくなっちゃうの？」

それを聞き、ディナちゃんはつまらなさそうに言った。

「うん、お友達と逸れちゃったから、探さないといけないんだ」

それを聞き、少し考えていたが、パツと笑顔になり

「それじゃあ、お友達が見つかったら、また來てくれる？」

そう聞かれたので僕は

「もちろん、約束するよ」

そう約束した。ディナちゃんはそれを聞きとても、喜んだ。

明日、此处を出る事に少し寂しさを感じた。

戦いの終わりと騎士の到着（後書き）

書いていてやっぱり戦闘シーンは難しかったです。

もう少し、詳しく書きたいと思っていたのですが・・・。

次回でこの村から出て、街でのシーンに入ります。

これにより、人物や設定等が沢山出てくるので、それをどうまとめようか、考えています。

恵吾の性格が少々安定していない点ですが、本編にも書いたようにテンションがあがった為に安定していない状態になってしまいました。

それでは、技紹介です。

42

*1 『つばめがえし』 ポケモン 「ポケットモンスター」
今回使ったのはポケモンが使ったので、アニメを基にした
発動です。なので上空から、というのにしました。

*2 『戦いの歌』 ネギ 「魔法先生ネギま」
肉体強化の魔法。肉体強化系としては割簡単な方。

*3 『破裏剣舞』 双剣 「hack G.U.」
双剣を持ち、独楽のように体を回転させて、周囲の敵を斬り付
ける。

*4 『疾風双刃』 双剣 「hack G.U.」
双剣で敵を連続で斬り付ける双剣士としては基本の技。

*5 『プラクテ ビギ・ナル 光の精霊11柱 集い来りて 敵を撃て 魔法の射手』 ネギ 「魔法先生ネギま」
純粋な破壊属性を持った光属性の矢を11本を相手に放つ。1本の威力は
それ程は高くない為、複数放つのが普通。

*6 『破道の四 白雷』 死神 「BLEACH」
指先から電撃を出し攻撃する。本来は無詠唱の場合威力は落ちるが魔力を多く込めて放った為、威力も高い。

*7 『デイベイン・バスター』 なのは スバル 「魔法少女リリカルなのはシリーズ」
直射砲撃魔法であり、ある意味、純粋な魔力攻撃とも言える。
威力を高めるためチャージすると発射に時間が掛かる。

*8 『足に魔力を込め、地面を蹴った』 ネギ 小太郎等の魔法、
気を使えて、ある程度のレベルに到達した者 「魔法先生ネギま」
足に魔力、または気を集中させて、それで地面を蹴る事で離れた距離にも一瞬で

近付ける。ただし、失敗して止まれないとそのまま、扱けてしまう。また、
動きが直線的で読まれやすい、という欠点がある。

*9 『無拍子』 兼一 「史上最強の弟子ケンイチ」
柔術・空手・中国拳法・ムエタイの4つの要訣をまとめて放つ突き。ノーマーシオンから発動できるが、威力が大きい分スキも大きい。

*10 『渦廻斬輪蹴』 昌 「史上最強の弟子ケンイチ」

足を渦巻きのように回転させて無数の蹴りの繰り出す。

旅立ちと森での発見（前書き）

ですので、今回は文の量が少ないです。

旅立ちと森での発見

食事の後、恵吾は村長達と色々話をした。どんな所に住んでいたか

家族はどんな人か等。恵吾は嘘がバレない程度に本当の事と混ぜて話した。

話していると夜も更けてきて、ディナが母親に寝る様に言われたが、

恵吾ともつと話したいと言って駄々を捏ねていたが、説得されて渋々諦めた。

「ケイゴ君、すまんな騒がしくて。あの子の父親、つまり僕の息子は盗賊に捕まった、皆を助けに行つて、捕まってしまったんじゃない。じゃが、君のお陰で無事に帰つて来られた。改めて、この村を代表して礼を言う。ありがとう」

お礼を言われたが、恵吾はくすぐったくなった。

「いえ、気にしないで下さい。僕が好きでやった事なので」

「そうか、じゃがお陰で助かったのは事実じゃ」

その後も、暫く話していると流石にこれ以上起きていては明日に響く、という事で部屋に案内された。

案内された2階の部屋でベットに寝転びながら

今日1日にあつた事を思い出していた。

「今日は凄く濃い1日にだったな。異世界に飛ばされたと思ったら、巨大な鳥と戦つたり、盗賊と戦つたりして……。んっんっ、さてと、寝るか。……。あつ、そうだ明日の朝、あれをやるか」

そう言つと、眠気が襲つてきて、すぐに眠りについた。

「ケイゴ君、起きてる？朝よ」

恵吾を起こす声が聞こえてきて、少し目が覚めて

「・・・知らない天井だ」

そう呟いた。

（お、言えた言えた。いや、昨日の夜に思い付いたのに忘れて無かったか。っと、んな事考えてる場合じゃないな）

早く起きないと迷惑掛ける、そう思い

「はい、起きてます。すぐに行きます」

返事をして、1階に降りた。

「おはよう、お兄ちゃん」

1階に降りると、ディナ来てあいさつをした。

「おはよう、ディナちゃん」

恵吾もあいさつを返していると

「ほら、2人共、顔を洗ってらっしゃい」

「はい、お兄ちゃん行こっ」

母親の言葉に返事をし、恵吾を引っ張りながら洗面所に行った。恵吾達が顔を洗い、リビングに戻ると見た事無い男の人が居た。

「やあ、おはよう。昨日はよく眠れたかい？」

誰かが分からず考えていると

「え、ええ。お陰さまで」

後ろからディナが駆け寄り抱き付いた。

「あつ、お父さん。お帰り」

「ああ、ただいま」

どうやら父親のようだ。だが何故、昨日は居なかったのだろう、考えていた。

「さあ、召し上がって下さい」

そして、食事をしながら話していると、どうやら昨日、

他の人達と村の復興を行っていたようだ。

「そうだったんですか・・・すみません。お手伝い出来なくて」

「ははっ、気にしなくて良いよ。君のお陰で誰も奴らに連れて行かれなくて済んだんだからな」

気まずそうに言う恵吾に対して、そう言った。

朝食が終わり、お礼を言い出て行くとしたら、ディナに少し泣き付かれた。それでも、もう1度来ると、昨日の夜と同じように約束すると泣きやんだ。

そして、村の入口にいるマダス達と馬車に乗ろうとしていると、村の人達が何人が居た。

「えっと、これは・・・」

恵吾が戸惑っているのと1人の男の人が口を開いた。

「ありがとな」「お陰で家族が無事だった」「ママを助けてくれてありがとう」「また、おいで。ごちそうするよ」

1人を切っ掛けに、そこに居た全員がお礼を言った。

「・・・これって」

「皆、ケイゴ君に感謝しているんだろう。君はこの村を救った英雄なんだから」

マダスさんはそう言い、そこに居た人達を見渡し

「ほら、皆に何か言わないと」

そう促した。しかし、正直いつて何を言えば良いのか分からなかったが、少し考えて

「えっと、皆さんお元気で。また何時か会いましょう」

そう言った。それを聞き、村の人達は大きな歓声を上げた。

「・・・」

村を出て暫く馬車に揺られて森の中を進んでいると「どうしたんだい？さっきから、ずっと黙っているが」

「いえ、ちよつと寂しくて」

それで、少し気まずい空気になったので、

「それで、城下町にはどんなのがあるんですか？」

空気を変える為に、そう聞くと

「そうだな、私達が向かうのはダルトニア街にある第2支城だ。周囲には海や川があるから商人達の間では魚介類が取引されているんだ。だから、市場も潤っているよ。ああ、それと、街では魚介類の料理が多いね。ただ、偶に漁船を狙った海賊が出るから少し危険もあるね。その海賊船っていうのは数年前に現れたばかりでね、っと話しがズレてしまったね。まあ、比較的平和な街だよ」

色々と教えてくれた。

（海賊か・・・盗賊といい何だか大変だな。もしかして、異変が原因なのか？）

「ここで、休憩して昼食にしよう」

半日程、馬車に揺られていると昼食時になった為、皆は馬車から降りて準備を始めた。

「昼食が出来るまで時間がある。この辺りを散歩してきたらどうだい？」

準備は同行していた女従、つまりメイドさんがテキパキとしている。それを見ていると、マダスが恵吾にそう言ったので、この付近を散歩する事にした。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

森の中を散策していると、木に幾つか実があった。

「これ食べれるのか？ うーん、『アンサートーカー』*1」
どうやら食べられる様なので、幾つか獲って食べていた

「おっ、中々おいしいな」

そうしていると他のとは少し違う実があった。他のは色が赤く楕円形をしているが、それは、オレンジ色で形も丸型だった。

まだ、熟していないのか、それとも病気なのか調べると、どうやら

めったに、出ず市場ではかなりの値段で取引されている物だった
それを取り合えず、『月衣』に入れておいた。
そして、恵吾は戻った。

戻ると準備が出来ていた。テーブルや椅子も準備が出来ていて、
案内され、座るとメイドさんがシチューとパンを。出してくれた
「どうぞ」

「ありがとうございます」

その後、食事が終わり片付けも終わった。
そして、馬車に乗り進んだ。

それから、2日程かけて恵吾達が乗った馬車は
ダルトニア街に到着した。

途中、特に事件は何も起こらず、騎士達とも話しの中で
少しだが、親しくなった。

「ここがダルトニアだよ。そして、あそこに見えるのが第2支城だ
よ」

街に入ると、賑やかな街通りと沢山の人達、そして道の奥には
城があった。家は石と木で造られた、ファンタジー系のRPG等に
よくある家だ。城は石で造られた灰色の大きな形である。

「は、大きいですね」

「ああ、もともと、首都にある本城はあれ以上だけどね」

あれ以上の大きさと聞き、少々驚いていた。旅の途中に第2支城
がある、という事は、

第3、4の支城があるのかと思い、聞いてみたが、どうやら支
城は2つだけのようにだ。

第2支城がここに建った理由は、海からの物が流通し、それと
同時に人も増える、

そうだった理由のようだ。

旅立ちと森での発見（後書き）

今回は恵吾が村から出発し、ダルトニアに着くまでの話でした。そういった理由もあり、文の量が少なめでした。

もう少し、詳しく書いても良かったかと思ったのですが、あまり、ダラダラ書いても面白くないかと思い、この量になりました。

技紹介

★1 『アンサートーカー』 清磨 デュフォー （金色のガッシュベル）

これは、あらゆる問いに対する答えが、瞬時に分かる。というものです。

戦いであれば、どこに当てれば効率的か、どうすれば回避出来るかが分かり、

他には機械でも、触るだけで使い方が分かり使いこなせる、等です。考える、

ではなく、思い浮かぶ、と言う方が正しいので、知らない事でも分かる。

城と城下街にて（前書き）

今回、ようやく街での話に入ります。
といっても街で何かする、というのは、あまりありません。

城と城下街にて

大きな門をくぐり、そのまま大通りの入口に着いた。

「我々はこれより、報告に向かうのだが・・・出来れば一緒に来ては貰えないだろうか？盗賊を実際に追い払った、君が直接言った方が分かりやすいし、もしかしたら褒賞が出るかもしれないよ」

そう言われると、恵吾には惹かれるものがある。

だが、その前に聞きたい事があった。

「うゝん、ところで、報告って誰にするんですか？」

報告をする、という事は立場の高い人に言う、という事だ。

「ああ、それは、この街を仕切ってらっしゃるフィスガブ家の現当主、ムガリウフ殿だよ。フィスガブ家は代々、この街を統治してきたね。街の人の人望も厚い方なんだ」

それだけ、聞けば良い人物に思えるが、それはあくまでも騎士としての視点なのだろう。

ならば、鵜呑みにする事は出来ない。他の立場の人、例えば一般の民達からは

どう写っているかも、重要な事である。

「・・・じゃあ、お願いできますか？ 会っても見たいですし、褒賞っていうのにも興味がありますし」

素直にそう言うとは、

「ははっ、そうかい。それじゃあ、もう少し待っていてくれ」

そう言って、馬車は大通りを進んだ。

「第2騎士団 団長マダス・アングルト 盗賊討伐任務の報告に来た。門を開けてくれ」

「・・・・はっ！・・・・」

マダスさんが、そう言うのと、城の門番の人達は中の人達に門を開ける様に伝えた。

それを聞いて、中の人が門を開けたようだ。

ギーーーーーー

大きな音と共に開いた門を馬車で通り抜けると大きな庭になっている。

そこでは、数十人が訓練を行っていた。

「あれは、第1騎士団の騎士達だよ。今は鍛錬の時間だからね。ちなみに反対側の方では、魔法士達が鍛錬しているよ」

「同じ騎士団なら一緒にすれば良いんじゃないや・・・」

「同じ、といってもこちらに居るのは、剣や槍、使ったとしても魔武器を使う人達は居るけど、純粋な魔法は使わないからね。だから別々にしているんだよ」

「さっ、来てくれ」

城に入り、しばらく中を歩いていると廊下の先に大きな扉があった。

コンコン ガチャツ

「第2騎士団 団長マダス・アンドルト入ります」

ノックをして入ると、そこには50代ぐらいで緑色の髪と髭を生やした

男の人が椅子に座っていた。

「話しは聞いている。そこに居るのが、そうなのか？」

「ええ、こちらのケイゴ ハタヤマが報告した者です」

「そうか、たった1人であれだけの盗賊を倒したのは本当か？」

「はい、事実です」

「ははっ、そうか。中々強いんだな。それに、礼儀正しい」

少し、笑いそう言った。

「あ、いえ・・・」

（参ったな。こんなに緊張するとは、やっぱり僕って、肝が小さいな・・・）

褒められた事に照れたのと、緊張からうまく答えられなかった。「私達の対応が遅れた為、盗賊達の暴挙を許してしまった。だが、

君のお陰で大した被害も無かった。この地を任された者として、心から礼を言う」

椅子から立ち上がり礼をした。

「部下に謝礼を用意させてある。後で、受け取ってくれ。……君はこれから、どうするつもりだい？」

「とりあえず、友達の情報を集めて合流したいと考えています。それから……また2人で旅を続けようかと……」

「……その友達とは、いつ逸れたのだ？」

「えっと、5、6カ月程前です」

咄嗟に適当な期間を言った。

「なら、もしも友達が隣国のウィガレディス国に入ってしまったら、探すのは困難となるぞ」

「へ？何ですか？」

「私たちの国、レンスウィートと数年前から、戦争中という事は知っているね？」

「え？ え、ええ」

「まずい、とりあえず話を合わせておくか。」

「以前は商人程度であれば行き来する事は出来たが、つい2カ月前に激化し、商人さえも通る事は困難になってしまったのだ」

ああ、なるほど。

「なるほど、だから探すのが困難って事なんですな」

「そういう事だ」

「まあ、なんとかしてみますよ。貴重な情報ありがとうございます
僕がお礼をすると、ムガリウフさんは手を叩き

「そうか。誰がある」

「そう言つと、扉が開き布袋を持った男の人が入ってきた。

「失礼いたします」

「これが謝礼だ。受け取ってくれ」

「そう言つて、布袋が渡された。

「ありがとうございます」

僕がお礼を言うと

「いや、本来ならもつと出せば良いのだが・・・何分、戦争中だからね、あまり出せなくてすまないね」

申し訳なさそうに言った。

「いえ、お気になさらず」

「それでは、私が外まで案内しよう。城の中は少々複雑だからね。迷ったりしたら大変だ」

「よろしくお願いします。それでは・・・」

マダスさんに連れられて、部屋から出た。

「ふゝ、緊張した」

城を出て、僕はようやく一息つけた。

「ははっ、大変だったね」

マダスさんの方を向き、

「それでは、僕はこれで」

僕がそう言うと、マダスさんはそう言い右手を手を出した。

「ああ、また何時か会えると良いね」

僕はその手を握り返した。

城を出てから、街を見ながらゆっくりと散策する事にした。馬車の中で聞いたように、

街は賑わっており、道行く人々の顔は活気に満ちていた。大通りから横道に入り、

しばらく進むと、人の数は少なくなってきた。だが、それと同時に商人や子供たちの声が聞こえて来るようになってきている。どうやら、大通りでは

馬車などの通行に使われ、裏の小さい道では商人による商品の販売や、子供たちの

遊びの場所になっているようだ。売られている品を見ると、野菜などの

食糧は見た事の無い物ばかりだが、やはり魚介類らしき物が多く売られている。

他にはお菓子等も売られていて、良い匂いがしてきている。

恵吾は、お腹が空いてきたので、軽く何か食べようと思い屋台を見ていると、

一際良い匂いのする屋台があったので、そこを覗いてみると、魚の切り身と野菜を

交互に挟んだ、

串焼きが売っていた。

「すみません、これを2本ください」

店番をしていた女性に言う

「あいよ。ほら、2ギルだよ」

威勢の良い声と共に串焼きを出された。恵吾は、貨幣のレートが分からなかったたので、適当に貰った袋から1枚硬貨を出して女性に渡した。

「えっと、すみません、これで足りますか？」

出された硬貨を見て女性は

「ちょ、ちょっと多すぎるよ。こんなに出されても釣りが無いよ」

そう言った。どうやら、金額が大き過ぎたようで、

受けとって貰えなかったたので、袋の中を見て、今度は違う硬貨を出した。

「あつ、すみません。えっと、それじゃあ、これで良いですか？」

「ああ、10ギルだね・・・」

今度は良かったようで、受け取ってもらえた。

「すみません。ついでに、この辺りに宿ってありませんか？」

まだ、日は高いが暮れる頃になってから、見つからなかった、では大変なので

日が高いうちに探しておこうと、考えたのだ。

「あんた、旅の人かい？」

「ええ、今日この街に着いたんですけど、まだ宿が見つかって無くて」

そう言うのと、女性は来た道とは逆を指して

「それだったら、ここを少し行つた所に『アトナ』って宿があるよ」

「そうですか、ありがとうございます」

それを聞き、すぐにその方向に行った。

「あ、ちよつと、釣りを忘れてるよ」

「それは、宿を教えてくれた、お礼です」

そう返答すると、女性は少しポカンとしたが、

「ははっ、あんた気前が良いね」

笑い、恵吾を見送った。

しばらく『アンサーターカー』で文字を翻訳しながら歩いていると、

『アトナ』という店があつた。

店のドアを開けると、1階では食事を出しているようで、

何人かが食事をしていた。恵吾はそのまま、奥のカウンターに

行くと、10代前半で赤い髪を肩まで伸ばして、快活そうな女の子がいた。

「いつらしゃいませ。どんな御用ですか？」

「しばらくここに泊まりたいんだけど、部屋は空いてるかい？」

「はい、大丈夫です。ちよつと待っていてください」

カウンターの下から帳簿とペンを出して

「ここにお名前を書いてください」

そう言われ、名前を書くとカウンターの奥にある部屋に入った。

「どうぞ、これが鍵です。部屋は階段を上って左に行つた1番奥の部屋です」

戻って来ると、右手には鍵が握られており、それを渡された。

「ありがとう、えつと・・・」

「あつ、私ナナって言います」

そう言い、階段を上り2階に上がった。そして、言われた通り左の1番奥の部屋に鍵を開けて入った。

部屋の中にはベッドが1つと、テーブルが1つにイスが2つあるだけの

簡素な部屋だった。恵吾はベッドの上に倒れこんだ。

「あゝ、気持ちいいゝ、最近はテントでの睡眠だったからなあ」

そのまま、しばらく起きなかったが、起き上がり部屋を出た。

「あつ、お出かけですか？」

「うん、そうだよ。あつ、そうだ、この鍵ってどうすれば良いの？」

「でしたら、私に預けてください」

鍵をナナに預けて宿を出た。

一旦、大通りの方に出て、街の散策を続けていると、城からかなり離れた所になる建物があった。看板の文字を読んできると

「ギルド 案内所」と書いてあった。「ギルド」の文字に惹かれ

て、扉を

開けて中に入った。中には壁には何か書いてある紙が大量に貼つてあり

それを、見ている人が何人も居る。他には何人かで談笑したりしている人も

居れば、カウンターの女性に話し掛けているいる人も居た。

カウンターに近付き、話を聞くことにした。

「いらつしゃいませ、ギルド案内所は初めてですか？」

そう聞かれ、

「え、ええ。それで、ギルドがどういう所か聞きたくて・・・」

答えると、

「分かりました。それでは、説明いたしますね」

「お願いします」

女性は説明を始めた。

「ギルドとは、元々は自警団が始まりなのです。国の騎士達が、すぐに対応できない

小さな村や町を守る為、動いていたのですが、少しずつ人数が増えていき今では

かなりの数が存在しています。それと同時に、守る為だけでは無く自分達では

行えない事を代わりに賃金を払って行ってもらう、というのも増えました。

ただ、国の騎士が在住しているような街にはあまりありません。何故なら、

何かあれば騎士達が解決してくれるので、お金を払ってまで頼む人は少ないからです。

ですが、中には騎士には頼めないような内容もあります。個人的な理由のもの、

例えば、個人商人方の移動、薬草や料理の材料の調達等の場合です。ここまでは、よろしいですか？」

なんとか、ついていけていたので

「はい、なんとか」

そう答えた。

「次にランクについてお話しします。ランクは上からS、AAA、AA、A、A、A、B、C、D、E

の8段階です。ランクにより受ける事の出来るクエストが変わってきます。

そして、AAランク以上でマスター権利が発生します。マスター権利とは自分のギルドを

作り、その責任者になる、というものです。ただし、マスターになるには

一定以上の資産を持っており、ギルド本部の承認を得なければなり

ません。

そして、ギルドを立てる場合は立てる町、もしくは村に他のギルドが存在しては

いけません。こういったギルドを個人ギルドといい、直接依頼人から依頼を

受ける事ができます。ギルドに新しい人間を入れる時は、ギルド本部に加入する

人物の情報を送ってください。それと、ギルドの規模に合わせて毎年ある程度の

金額を送金するようになっていきます。以上がギルドの説目になります。

御用はギルドへの登録ですか？ それとも、御依頼ですか？」

「ギルドへの登録をお願いします」

そう言つと、奥から用紙を持って来て、

「はい、それではお名前をこちらにお願いします」

名前を書き、用紙を返すと

「では、こちらの部屋へどうぞ。こちらで、写真を撮ります」

奥の部屋へと案内された。

城と城下街にて（後書き）

後半はギルドの説明で終わってしまいました。

少し分かりにくかったでしょうか？

イメージとしては街にある、誰でも受けられるクエストがあるのが、モンハンのギルドで、個人のが FAIRY TAIL

L のギルド

といった感じです。

登録と初クエスト

奥の部屋に入ると、4つの足が付いた20センチ四方の木の箱があった。

恵吾はこれがかかわからず、戸惑っていたが女性に

「では、この前に立ってください」

言われた所に立っていると、

「それでは、撮りますよ」

その言葉から、目の前にある物がどうやら、カメラのような物で、それを使い登録に必要な顔写真を撮るようだ。

「はい、良いですよ」

パシャッ

光と共に音が出た。

どうやら、本当にカメラのような物らしく、光も音も

写真を撮った時と同じだった。

「それでは、しばらく中でお待ちください。出来ましたらお呼びします」

そう言われ部屋から出ると、呼ばれるまでの間、壁に貼ってあるクエストを見ていた。

「えっと、『隣町までの護衛をお願いします』『マンル工草を見つけて下さい』」

・・・へえ、色んなのがあるなあ」

クエストを見ると、薬草や肉類等の採取系から商人等を守る護衛系、

危険な獣等を退治する討伐系まで様々な無いようだった。紙には他に報酬や

依頼人の名前が書いてあった。そして、紙の左上にはCやD等のおそらくクエストのランクと思われるのが書いてある。

他の人を見ていると、屈強そうな男が採取クエストを選んでいたり

軽装の女の子が討伐系を選んでいたり、と見た目とクエストの内容に

ギャップがあり、驚きや面白さがあった。

それらを、しばらく見ていると

「ケイゴさん、登録の準備が出来ましたカウンターまで来て下さい」
呼ばれたので、カウンターに行き

「名前はケイゴ ハタヤマ 男性 20歳でよろしいですね？」

「はい、間違いありません」

差し出されたカードに間違いが無いのを確認して受け取った。

「それでは、登録いたします。……はい、登録が完了いたしました。」

これで、クエストを受けられます。但し、あなたのランクは1番下のEランクです。

クエストを受けられる時は、壁に貼ってある用紙を持って来て下さい。

それで、受注出来ます。クエストが終了したら、ギルドに行き終了確認をしてください。

そして、カードを提出し、カードに完了を記録します。紛失したり破損した場合は

再発行できますがその際には、30ギルが必要ですのでお気をつけください。

それでは、クエストのランクについて詳しく説明いたしますね。まず、あなたが受ける

事が出来るクエストはEと1つ上のDランクまでです。

それと、チームを組んでいる場合は1番ランクの低い人に合わせる事になります。

それと、S～Aのクエストは自分のランク以上は受けられません。ランクの上昇方法は

自分と同じランクのクエストを15と1つ上のクエストを5つ成功すれば上がります。

ただし、A A以降についてはマスター権利もありますので、ギルド本部が定めた

クエスト、及び試験をクリアする必要があります。それと、個人ギルドでのランクに

ついてですが、基本的にギルドが定めたものと同じなのが多いですが、中にはそのギルド独自のものもあります」

そう言い、一旦区切ると恵吾の方を見て

「他に質問はありませんか？無ければ、これで説明を終わらせて頂きます」

「はい、大丈夫です」

今まで聞いた中には特に問題は無かったので、恵吾はそう答えた。「それでは、お氣をつけて」

女性はお辞儀をするとそう言った。恵吾はカウンターを離れ、壁に貼つてあるクエストを見てみた。

「さてと、何にするかな・・・おっ、Eランクの『ガンヒユの実を10個採ってきて下さい』か。場所は、街を出て近くにある森か。これなら簡単そうだし、これにするか」

どういうのにしようか、迷っていたがその中に割と簡単そうなクエストがあったので、それを受ける事にした。恵吾は壁に貼つてある紙を取って

「あの、すみません。このクエストを受けたいのですが」

そう言い、カウンターに居た、先程とは違う女性に受けたい旨を伝えた。

「はい、分かりました。こちらは期間は明日までです。実はこちらに持って来て下さい。それと、明日までであれば何度かに分けて持つて来ても構いません」

クエストの補足説明を受けた後、その紙の控えを貰い案内所から出た。

そして、これからどうするか考えて

「さてと、『月衣』に入れても良いけど、魔法の説明が面倒だしリュックとかは必要だな」

そう決めるとゲームの経験から、欲しい物はおそらく雑貨屋に売っている

と判断し雑貨屋を探す事にした。

しばらく歩いていると雑貨屋を見つけ、扉を開けて店に入ると中には中年の男がいた。

「いらっしゃ、何をお求めで？」

「えっと、リュックを1つ下さい。それと、地図つてありますか？」

「リュックだったら、その棚にあるよ。地図はちよつと待ってな」
そう言い、リュックや鞆等が積まれている棚を指差した後

店の奥に入り少しすると3つの地図を持ってきた。

「ほら、この辺りの地図と街の地図、これがこの周辺の町や村の位置が書いてある

地図だ。地図によって値段が違うが、どれが良い？」

今はクエストの内容上、周囲の地図が欲しかったので、それを指し、

飾ってあったリュックを1つ持ってきた。

「それじゃあ、この辺りの地図を下さい。それと、このリュックも」

「あいよ、じゃあ合計で35ギルだ」

「えっと、これ4枚でいいですか？」

「40ギルか、なら釣りの5ギルだ。他に何か欲しい物はないか？
家は色々あるぜ」

考えてみたが、特に必要無かったので

「うーん、今は特に無いので、またそのうちに」

そう言つて、店を出た。

「えっと、地図によると街を出てあつちか・・・」

門を通り、外に出て地図を確認し目的地である森がある方向を確かめた。

しばらく歩くと、地図通り森があった。森に入ると木を見ながらガンヒユの実を探していたが、中々見付からず、10個を見付けるのに

かなり時間が経ってしまった。

「・・・これで10個、と。結構大変だったな。でもまあ、10個見付かったし街に戻るか」

目的を達成し街に帰ろうとしていた時、近くの木の下に倒れているメイド服の女の子と木の実が入った籠が落ちていた。

「ん？あれは・・・って、大変だ」

初めは倒れているだけ、と思っていたが近付いてみると

女の子は頭から、血を流して体にも擦り傷があった。

「大丈夫ですか！ 意識はありますか？」

近付き呼び掛けてみるが反応せず、グッタリしている。恵吾は危険と感じ、

「まずい『サイフォジオ』*1 どりゃっ」

ピンク色の大きな剣を出し、それを刺した。剣が光ると上部に付いている

羽が回り出すと傷が少しずつ治っていき、しばらくすると怪我は完全に消えた。

「あのっ、大丈夫ですか？」

目が少し開いたのを確認すると、そう尋ねてみた。

女の子は起き上がったが

「・・・え？ええ。えっと、私はいたい・・・」

自分に起こった事が理解できておらず、戸惑っているようだ。

恵吾はゆっくりとした声で

「あなたは、ここで倒れてたんですよ」

そう言うと、女の子は自分の周り、それと恵吾の方を向き

今の状況を理解し始め、気を失う前の事を思い出した。

「確か『レスフィの実』を採取中に木から落ちて気絶したんだわ」

「そうだったんですか、ははっ、びっくりしましたよ、女の子が倒れて血も

出でて・・・」

「血が?!」

女の子はそれを聞き、慌てて体や頭に触れてみるが、血は付いているものの

何処にも痛みは無く、出血も何処にも無かった。

不思議がっていたので、

「ああ、それだったら僕が治しましたよ」

恵吾がそう言つと、驚いたがすぐに安心したように息をつき恵吾の方を向き

「ありがとうございます。あなたは魔法士なのですか？」

礼を言い、お辞儀をした後、質問をしてきたので答えた。

「うん、まあね、クエスト来ていて。あなたは、なんでその木の実を？」

何となく気になった恵吾がそうやって聞くと

「私はお仕事で来たんです。私はお城に仕えているんです」

それを聞き、恵吾は女の子がメイド服を着ている訳も分かり納得した。

「へえ、お城のメイドさんってそんな事もするんだ」

恵吾が呟き考えていると、女の子は

「くすっ、それでは私はこれで、ありがとうございます」

小さく笑い、再びお礼を言つと、近くに落ちていた籠を拾い上げ街の方に歩いていった。

「あっ、いえ。それでは」

恵吾は女の子が見えなくなるまで、歩いて行つた方を見ていた。

「っと、僕も早く戻らないと日が完全に暮れる」

既に、日は落ちかけていて森も暗くなり

虫や動物たちの声も聞こえなくなり始めている。
これ以上ここに居ると迷いかねない状況なので
このまま、街へと戻り報告に行く事にした。

街に戻った恵吾はすぐに案内所まで行った。途中、街の様子を見ていたが

遊んでいた子供達の声は聞こえなくなり、大通りも人通りが少なくなってきた。

案内所に入ると、ここも人の数が少なくなってきたおり、昼間の半分以上

の人数しかいなかった。カウンターに行きクエストを終えた事を報告し、

リュックから【ガンヒュの実】を取り出し、それを渡した。

「確認しました。【ガンヒュの実10個】納品されたのでクエストは

クリアとなります。それでは、ギルドカードをお出してください」

カードを出すと、何かにかざすと

「カードに登録いたしました。お返しいたします」

受け取り、今日はこれで終わりにするつもりなので、案内所を出て宿に戻った。

「いらっしゃ、あ、お帰りなさい」

宿に入ると忙しそうに働いているナナが気が付き言った。

宿に着いた時には、日も暮れており晩飯時なのか、多くの人達が食事をしながら騒いでいた。その人達の間を縫い開いている席に着くと、しばらくしてナナが来た。

「お帰りなさい、どこに行ってたんですか？」

「ちよっと、クエストで街の外にね」

「ケイゴさんってギルドに所属してたんですか？」

「今日なっただばかりの新米なんだけどね。っと、それで注文なんだ

けど、これとこれ大丈夫？」

「はい、では少し待っててください」

恵吾はテーブルの上にあった注文票に書いてあるのを読み、2つ指し、聞くと大丈夫だったようでナナはそう言い、厨房の方に注文を届けに行った。

待っている間、暇だったので、どうしようか考えていると

「・・・だな。だけどそれって危険じゃないか？」

「まあ、多少は危険だが大丈夫さ。Cクラスの奴らも一緒なんだ。海賊なんて問題ないさ」

「ちえっ、俺が泳げればな・・・」

（海賊か・・・そう言えば、最近出るって言ってたな。僕も行ってみたいけど

多分DかCランクのクエストなんだろうな）

聞いた内容から考えると、マダスから聞いた海賊を討伐、もしくは捕まえる

という内容のクエストだと判断した。しかし、それは妙だった。ギルドにクエストは

城に頼めない、私的なものだと言った、海賊なら城に直接頼めばやってくれそうなモノ。変だと思っていると

「お待たせしました」

ナナが料理を運んできた。恵吾は考えるのを止めて料理を食べる事にした。

登録と初クエスト（後書き）

今回、ギルドに登録してクエストを行う話でした。
話はやっぱり難しいです。

それと、色々なフラグを立てたり立ったり、大変でした。
展開をもう少し早く出来れば良いのですが・・・。

技紹介

＊１ 『サイフォジオ』 ティオ（金色のガッシュベル）
回復系の呪文で、剣を刺した対象の傷を治し心の力（魔力）も
少し回復させる事ができる。対象を貫く事で、その後ろに居る
者も回復させれる。

始めての運搬クエスト

食事が終わり、代金を払った恵吾はナナから鍵を受け取り部屋に戻った。

恵吾はこれからの事について考えていた。

手元に今あるのは褒賞で貰った金額と先程のクエストの報酬だけであるが、

それでも金額的には、それなりにある。だが、ここの宿泊費や飲食代、そういったモノには毎日掛かる。

クエストの報酬は現段階では多くない。そうならば、その内に足りなく

なり生活も儘ならなくなってしまう。となれば、早い段階でランクを

上げるか、何かを売ってお金に変える必要がある。

今あるのは森で見付けた珍しい木の実、それと倒した鳥の部位をモンハンのように剥ぎ取って、売るのも1つの手、

そう考えていた。

（明日、ギルドで鳥の事も聞いておくか・・・）

眠くなってきたので寝ようと思ったが、昼間に汗をかいたりして汚れたりしているのでお風呂に入りたかったが、聞いた話ではこの世界には

お風呂は存在しているが、それは銭湯のような場所であり今の時間帯には既にやっていないので、行く事もできない。

なので、恵吾は『清めの炎』*1を使うと、淡い炎が体を覆うと恵吾の体の汚れは消えていった。

服は予備を持っていなかったので『投影』*2を使い、服を作るとそれに着替えた。

着替えが終わると、ベッドに寝転び布団を被り眠りについた。

次の日、朝になったので起き、1階に行くと人はあまり居らず、カウンターには女性が1人居た。

「えっと、おはようございます・・・」

恵吾があいさつをすると、恵吾に気付いたようで

「ああ、おはよう。あんたは・・・もしかして、昨日から泊まってるギルドの人かい？」

「え、ええ。でも何で・・・」

今、会ったばかりなのに何故知っているのか気になった。

「ナナから聞いたんだよ。昨日、泊まったお客がギルドに所属してる、

ってね。それでさ。　　と自己紹介がまだだったね。あたしは、ナナの

母親のヒルカ、よろしくね」

それを聞き納得した。

「そうだったんですか。　　えっと、まだ食事の注文って大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ。　　でも、あんた随分とゆっくりなんだね。

普通は早く起きてクエストに行くか、良いクエストを予約しておくもん

なんだけどね」

その事は知らなかったが、少し難しく思った。

「・・・ははっ、そうなんですけど、僕ってあんまり朝が強くないので」

「すみません、それじゃあ、これとこれをお願いします」

空いていた席に座り注文をすると、

「あいよ、ちよつと待ってな」

そう言い、奥にある厨房のに入っていた。

恵吾は待つ間に今日の予定について考えていた。まずは、鳥につ

いての

事、あの鳥の名前や、どういう扱いなのか。他にも短時間で終わるクエストを

探して済まして、早くランクを上げる予定だ。

暫くして、料理が運ばれてきたので、食べる事にした。

食事が終えて、料金を払うと部屋の鍵を預け、ギルドに出かけた。街は昨日と同じように人で溢れていた。ただ、その中で少し武器を持っていたり、杖の様な物を持った人達が多く見えた。恵吾は昨日とは時間帯が違うからだけかと思っていた。

ギルドの扉を開けると、

「こつちも頼む、早くしてくれ」「これは、まだ大丈夫か?」「早くしてくれ、間に合わなくなる」

ギルドの中は、何やら騒然としており、ほぼ全員が慌ただしく動き回っている。カウンターも同様に、受付の人達が次々と持つて来られる

クエスト用紙の登録に時間が掛かっている。

恵吾は近くに立っていた30代頃の男の人に

「あの、何かあったんですか?」

「ん?ああ、何だか、今朝になってクエストが大量に発注されてな。おまけに、ランクの割に報酬がかなり良くてな。それで、皆急いでるんだ」

聞いてみると、そう教えてくれた。

「へえ、ここでは、そんな事がよくあるんですか?」

「まさかっ、こんな事は俺の知る限りじゃ初めてだ。だから、皆慌ててやってるんだ。こんなのは2度と無いかもしれないからね」

恵吾はそれを聞き考えてみたが、何も思い付かなかった。

基本的に恵吾は頭が良い方では無く、難しい事を考えるのは得意では無い。

そのまま、暫く待っていたが収まる気配は無いので、諦めるのも

1つの手だったが、恵吾は折角来たのだから何か1つ位はクエストを

行いたいと考え、壁にあるのを何とか見ようとしたが

人が多く居る所為で中々見る事が出来ないでいる。少しすると前に僅かに進めるようになったので、そのまま進んでようやく壁際まで

到着した。しかし、それからもクエストを見ようにも他の人が邪魔で見る事ができない状態だ。とりあえず、今のランクで受けられるのを適当に取ると、人混みの中から必死に出ると人の少ない所で

自分が取ったクエストを見てみた。

『ブリエスまで、荷物を運んでほしい』

というものだった。これをカウンターまで出さなければならぬがこれもまた、大変だった人混みの中を再び進み、何とか着いた。

「すみません、これを受けたいんですけど・・・」

人に揉まれ苦しくなりながらも受け付けの人に言うと、受付の人も疲れているようだった。

「はい、えっと、これでしたら今日の昼ですので、もうじき出発です。それと、

もう1人いらっしゃるので、お2人で行って頂きます。よろしいですか？」

「大丈夫です」

「では、街の入り口の門に言って下さい。そこで、係りの者が荷物をお渡しますので、こちらの控えをお見せください。よろしくお願ひします」

やっとの事で、登録したもののクエストの時間まで、あまり時間が無いので

裏道にある、屋台を見付け食事を終えた。そして、門まで行くと昨日

以上に人通りが多かった。ギルドの人を探そうとしたが、門の近くに

大小様々な荷物を持った人達と、さらにその周りに何人かの人達が居た。

その人達の周りに居る人達が紙を見せて荷物を受け取っていたのでもしかして、と思い近付いてみると、その人達が見せていたのはクエストの控えの紙だった。

どうやら、ここで荷物を受け取るようだ。それが分かったので、恵吾は並び

順番を待つと

「すみません、このクエストのは、どれですか？」

「ん？ああ、ちよつと待ってね。……これは、あそこに行つてね。先に来た人

が待つてるから、その人と一緒にこれを出して出発してくれ」

そう言われたので、その場所に行くと他にも何人が同じように待っており

誰が一緒の人がよく分からなかった。どうやら、この辺りは荷物等を運ぶ

クエストを受けた人達が集められているようだ。

他の人は自分と同じクエストの人が聞いているので、同じように聞こうと思った矢先

「なあ、あんたのクエストってこれか？」

いつの間にか、近くに来ていた男が聞いて自分のを見せてきたが恵吾のとは違ったので、それを伝えると「そうか」と一言だけ言つと、ほかの人に聞きに行った。恵吾が再び誰かに

話しかけようとした時、

「あなたのクエストはこれ？」

少し小さな声で後ろから話しかけられた。後ろを振り向くと恵吾よりも頭1つ分ほど低い身長で白い髪を肩まで伸ばしており動きやすそうで青色を主体とし、黒色が所々にある服装の

少女が居た。

「あ、え、えっと、うん、確かに、これだよ」

「そう、なら荷物を受け取って出発しよう」

そう言くと、少女は荷物場に進んで行った。恵吾もハツとして慌てて

後を追いかけた。指定の場所で荷物を受け取り出発する事となつた。

荷物は縦が2メートル、横が1メートルはあるそれなりに大きい物だった。

「これ、どうする？」

「あ、ああ。それだったら僕が持つて行きますよ」

「重いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫です。僕、力持ちですから」

そう言い、2人は出発した。

「私は、フィーナ・ディアウエル。あなたは？」

自己紹介されたが恵吾の精神は今、混乱と困惑、それと極度の緊張の

中にいた。何故なら、

（少し話しただけ、だけど間違い無い。あの子……クーデレタイプだ！）

一緒に行く事となつた少女が恵吾のタイプだったからだ。

恵吾は元々女の子に縁が無かった。それが、自分のタイプの子が目の前に

現れたら、動揺するのも仕方が無かった。

「?・・・どうしたの？」

「あつ、いえ、何でもないです。僕は恵吾 端山って言います」

自己紹介すると、フィーナは前を向き、進みだした。

始めての運搬クエスト（後書き）

今回から少しずつ物語は動きだします。

それと、そろそろ主人公や他のキャラの設定でも書こうかと思えます。

技・能力

*1 『清めの炎』 フレイムヘイズ達（灼眼のシャナ）
体の汚れを落したり、自分の体内の毒を消す効果もある。

*2 『投影』 士郎 アーチャー（Fate/stay
n
ight）

自分のイメージを元に、一時的に物体を作り出す魔術。
但し、これは使用者覧にある2名の場合はいつまでも消えない
というのを使っている為、消える事は無い。

キャラ設定？

キャラクター紹介

？名前？ 性別？ 能力？ 立場？ 年齢

？ 性格や備考

今回は主人公の恵吾と設定上はもう1人の主人公である一輝を紹介します。

？^{ハタヤマ}端山^{ケイゴ}恵吾？男？様々な物語に登場する技・能力・体質を用でできる

？ギルドのEランク？20歳

？神と名乗るおっさん（おっさんじゃ無いわよっ！）・・・存在によって

異世界に飛ばされた主人公。アニメや漫画、ライトノベルが好き。

ネット小説でもファンタジー系をよく読む。なので、技や能力に関しては

それなりに知識がある。

真面目で数学が得意だが、語学がかなり苦手。

大人しく、喧嘩等の争い事はあまり好きではないが、テンションが上がると

騒がしくなったり、好戦的になる。

クーデレキャラや大人しいキャラが好き。

？森田 モリタ カズキ 一輝 ？男 ？様々な物語に登場する武器・アイテムを取り出し使用する事ができる。

？ 現在不明 ？20歳

？ 恵吾と同じく異世界に飛ばされた。趣味は似ているが一輝はライトノベルや

アクション系のゲームの方が好き。なので、アイテムや武器は恵吾よりも

多く知っている。

勉強は基本的に苦手だが、ライトノベルのお陰で漢字や文章の読解力は優秀。

気難しく、自分が好意を持つ相手以外には、あまり愛想が良くない。

短期で時折、暴走する。気に入った作品は何度も見たり読んだりする。

ツンデレキャラや元気っ子キャラが好き。

2人が知り合ったのは、高校の時で同じクラスになり、趣味が同じだったのが切っ掛けで話すようになり、仲良くなった。お互いに良いと思った作品を

教え合う等もしている。

お互いの好みのキャラは、ほぼ真逆だが、その事で争ったりしない。

旅の仲間と危険な道行（前書き）

お久しぶりです。

更新が遅くなってしまってますみません。

もう少し、早くしたかったのですが……。

今回は戦闘で技を沢山だしすぎて、大変なことになってしまいました。

旅の仲間と危険な道行

街を出て移動する際には基本的に馬や馬車を使用するのだが、クエストの場合は

依頼人が用意、もしくはギルドが必要と判断した場合のみ無料で使用する事が

出来るのだが、それ以外では実費で借りる必要がある。だが、このランクの

クエストの報酬を考えると、借り費の方が多く掛かってしまうので、

借りないのが普通である。なので今、恵吾は女の子とたった2人で居るのだ。はっきり言ってしまうにもこうにも戸惑っていた。

出発前に聞いた話では、これを届ける町まで歩いて4日は掛かる場所らしいのだ。

「どうしよう……」

恵吾はこれから先の事を考え、頭を悩ませていた。自分のタイプの女の子に

会えたのは、正直嬉しい。しかし、唯でさえ女性に免疫が無いのにこんな状況になってしまい、嬉しいやら困ったやら……。

「荷物、重くない？」

今まで黙々と前を歩いていたフィーナが話しかけてきた。

「えっ?! え、ええ。大丈夫です」

自分よりも後ろを歩いている、恵吾が疲れたから遅れていると思っただのか、そう聞いてきたようだ。

「……そう」

そう言つと再び前を向き、歩き始めた。

そのまま、暫く歩いていると、日も暮れ始めて辺りは暗くなりつつあった。

「そろそろ、休む？」

「へっ！？ え、ええ。そうですね」

恵吾がそう言つと、フィーナは手に持っていた杖を地面に置き、肩に掛けていた鞆の中から小さい袋を出し、中から黒い塊を出して、食べようとしていた。

「あの、それは？」

恵吾がそう聞くと、開けていた口を閉じ

「携帯用の食糧」

そう言つた。

「あの、僕が何か作りましようか？」

「・・・出来るの？」

「はい、簡単な物ですけど」

暫く考えていたが

「・・・（コク）」

頷くとフィーナは座つたので、その場に荷物を置き森の中に食材探しに行った。キノコや木の実等を探し、毒が無いかを調べ問題無ければ、それを集めた。それから大した時間も掛からず十分な

量が手に入った。それと『投影』を使い、鍋や包丁等の調理器具を作つた。

恵吾は荷物の所に戻るとフィーナがこちらに気が付いた。

「・・・それ、どこから持ってきたの？」

恵吾が持っていた調理器具を見て、そう呟いた。

「えっと、作りました」

「？ どうやって？」

そう聞かれたので答えて、

「こつ、^{トレス・オン}投影開始」

『投影』を使い皿を出した。

「！・・・知らない魔法」

行き成り現れた事に驚き、呟いた。

「え？・・・あつ、・・・」

何気なしに使ったが、こういった魔法は無いのか、フィーナの言葉
葉を聞き

失敗したか、と思つてフィーナの方を見ると、

「・・・」

何も言わず暫く見てから、その場に座った。

「・・・あつ、そうだった、料理料理」

そう言い、恵吾は包丁を取り出すと採ってきた食材を切り

「『プラクテ・ビギ・ナル アルデスカット』*1」

集めてきた薪に火をつけ鍋で炒めて、水を注ぎ入れて煮込んだ。

調理については料理の得意なキャラの料理能力を使った。

『例えば、某正義の味方とか、ヤンデレで空鍋とか』

暫くすると、良い匂いが漂ってきた。恵吾が気が付くと、フィー
ナも匂いに

釣られたのか近くに来て鍋の中を覗いていた。

「・・・」

恵吾がその様子を見てみると、その事に気付いたフィーナは

「？ 何？」

そう言い、首を傾げた。

「っ！ な、何でもない・・・」

恵吾が慌ててそう言つと、興味を無くしたのかフィーナは再び鍋
の中を見始めた。

そのまま、暫く煮込んでいると完成したので恵吾はお玉を使い皿
に注いだ。

「どうぞ、熱いから気を付けて」

フィーナは皿を受け取ると、スプーンですくい一口飲んだ。

「おいしい」

それを聞き、恵吾は安心した。

その後、食事は進み鍋の中は空になった。その殆どがフィーナによるものだが……。

食事を終えた後、鍋等の調理器具は洗い『月衣』に仕舞った。

それを、フィーナは興味深そうにジッと見ていた。仕舞い終えた恵吾は

「えっと、荷物は見張っておくから眠ってて良いよ」

「（コク）……暫くしたら交代」

そう言い、木にもたれ目を瞑り眠りに入った。恵吾は近くにあった木の枝を焚火に

足しながら、消えないようにしていた。

そのまま、数時間が経過した頃

「（ムク）……」

眠っていたフィーナは目を覚まし立ち上がった。

「まだ眠ってても良いよ。僕だったら大丈夫だよ」

「（フルフル）違う、敵」

「え？」

首を振り、そう言っていると周囲を見渡すと

「囲まれている。迂闊だった」

『白眼』で確認すると、確かに複数の人間に囲まれていた。

（人数は1、2、3……15人か）

「戦える？」

「大丈夫、いけるよ」

戦闘態勢をとっているフィーナに聞かれて恵吾は答えた。

周りを警戒しつつ荷物にも気を配っているフィーナを真似て恵吾も同じように警戒していると

ドドドッ！

地面から石の槍が恵吾とフィーナ目掛けて発射された。

だが、恵吾は既に発動していた『支配眼』*2により自分に向かつていた物は

全て回避し、フィーナに向かつていた物はフィーナと石の槍の間に入り

全てを手と足を使い弾き飛ばした。

「っ！ 早い・・・」

フィーナが呟くが、恵吾には聞こえていなかった。周囲を警戒している

ゴウッ！

火球が幾つも飛んできた。

「『セウシル』*3 姿を見せろ」

2人と荷物をまとめて守ると、周囲に居る人に向けてそう叫んだ。

『白眼』で確認してみると敵が少しずつ近付いて来ていた。

「気を付けて、少しずつ近付いて来てるよ」

「（コク）」

恵吾に言われ頷いて構えていると

「子供が2人と侮っていたが、中々強いな」

森の方から声が聞こえてきた。声は男のそれも、かなり歳のいつている

人間のものだった。

「荷物を置いていけ。そうすれば命は助けてやる」

荷物を狙っている、という事は先程の動きを見て殺すには手間が掛かるから荷物だけでも頂こう、そう考えていたが

「それは断らせてもらいます」

恵吾の一言によって、無駄となった。

「そうかい。なら、死んでもらうぞ」

それと共に、周囲から石や氷、様々な槍や刺が飛んできた。

恵吾が消そうとすると、横からフィーナが杖を構え

「「逆巻け 守れ デイウィンナ」」

詠唱を行うと、周囲の風が渦を巻き2人を守った。

恵吾が感心していると、敵の攻撃が止み風も消えた。風が消えると同時に恵吾は『速』で

森の中に入り攻撃をする事にした。本当は大規模攻撃を行おうと思ったが、

周囲に木々がある所為で下手をすれば周囲を火の海にしかねないので、攻撃方法を

近接系にする事にした。

「ぶっ飛べ『ゴウ・バウレン』*4」

「があっ！」

「なっ、ぶふぁ」

森に居た敵を見付けると一瞬で近くに行き、強化した拳で殴り近くに居た

もう1人にぶつけた。

それを目視できた数人は息を飲み恐怖を覚えた。

「何をしている、攻撃の手を休めるな！」

「っー！」

その声を聞き、茫然としていた他の数人は冷静になり攻撃を開始した。

「「穿て グデユス」」

詠唱が聞こえると、左右から石の槍が飛んできた。どうやら先程の攻撃と同じ物のようだが、恵吾はそれを認識すると腕を左右に広げ

「『リオル・レイス』*5」

黒い螺旋状のエネルギーが放出され、石の槍を消し去った。

だが、それと同時に真上から電撃と氷の刺が降ってきた。

「早い！ え、えっと、こういう時は……」

恵吾は早い展開に焦り混乱していた。いくら能力を得たとしても

実際の戦闘経験に

関しては素人、咄嗟の事に対応しきれていなかった。

電撃と氷は恵吾に直撃するかと思われた。だが、それは先程まで恵吾が居た場所からの

竜巻によって恵吾に当たる事は無く防がれた。竜巻が来た方を見ると、フィーナが杖を

こちらに向けていた。どうやら、フィーナの援護だったようだ。

「（コク）」

どうやら援護は任せろ、という事らしい。それを見て安心した恵吾は木の間を抜け

走り倒していった。何度か敵の攻撃が当たりそうになったが、それは全てフィーナの

魔法によって消された。

そして、他の敵は倒しつくし残りが1人になった。その1人を探索そうとしたが

探すまでも無く、恵吾達の前に堂々と姿を現した。男は鎧を身に纏い

厳つい顔をしていた。

「仲間は全て倒しました。残っているのはあなただけです。降参してください」

「断る。その程度の奴らがやられたからといって、どうという事はない。それに、俺をそいつらと一緒にするな、よっ」

そう言い、男は突っ込んできた。

「・・・っ！」

2人は驚いたが、すぐに恵吾も突っ込んだ。

「「粉碎しろ 剛腕 ゴルデイス」うらあーっ！」

詠唱と共に両腕に岩が付き大きな拳になり、それで殴り掛かってきた。

「『支配眼』 そんなのに当たるか」

すぐに回避すると

「小さく前ならえ『無拍子』」

「がふっ」

ギリギリまで接近し拳を腹に叩きこんだ。

「よし・・・ぐっ」

だが『支配眼』の副作用によって体に痛みが走り、恵吾は膝をついた。

相手はそれを見逃さず、殴り掛かってきたが、

「打ち抜け 不可視の剣 フェンデリア」

「ぐっ、うっとおしい」

フィーナが放った風の剣によって防がれた。それに怒りフィーナに向かっていったが

「『ギガノ・レイス』*6」

恵吾が後ろから放った魔法が直撃した。

「これで、どうだ？」

衝撃で砂煙が上がっている所為で見えなくなったが突如

ブフォオッ

音と共に発生した風によって砂煙は無くなり、そこには鎧は碎けているものの、あまり傷を負っていない姿で立っていた。

「ハアハア、さすがに今は危なかったぞ。だが、この程度ではやらねんわ！」

「粉碎しろ 大地の片鱗 我が怒りと共に ローガス・トゥディアス」

男は詠唱を行うと地面に右手を叩きつけた。すると、地面が揺れ恵吾の足元の地面に複数の亀裂が入ると、爆発した。

「っ！！」

「これでどうだ・・・」

それを見たフィーナは驚き声を失い、男は成功し恵吾を倒したと思った。

しかし、

「ハアハア、 し、死ぬかと思った・・・」

恵吾は攻撃が放たれた所には居らず、それよりも横の所に膝を付き、

肩で息をしていた。

「・・・今でも倒せんか」

そう言い、男は背中に背負っていた刀を鞘から抜き構えた。

「はああああー！ー！ー！ー」

男は叫び恵吾に向かって突っ込むと同時に剣を上から振り下ろした。恵吾はそれを

横に回避したが、振り下ろした剣を僅かに持ち替え横に振り払った。

「ぬおっ！」

それかわしたが、後ろにあった木が真つ二つになった。

「！ー！」

恵吾は木が真つ二つになった事にも驚いたが、それよりも木が切られた時に

電気が走った事に驚いた。

（さっきの電気、それにあの形って・・・もしかして、いや、でも・・・）

ブンッ シュッ

男は休む事無く斬撃と突きの押収を掛けてきた。さらに刀だけでなく

魔法も混ぜて攻撃をしてきている。フィーナは援護をしようにも2人の動きが

激しく狙いを定める事が出来ない為、動けないでいた。

暫くの間、攻撃と回避が繰り返されいたが、それは突如終わりを告げた。

ブンッ

「・・・っ！」

男が上から振り下ろした瞬間に先程までの戦いで歪んだ地面に足

を取られ

バランスを崩した。恵吾はそれを見逃さず懐に踏む込み

「『虚刀流一の奥義 鏡花水月』*7」

恵吾は強烈な拳底を腹に放った。

「が、あ………」

呻き声と共に倒れこみ動かなくなった。

旅の仲間と危険な道行（後書き）

前書きでも書きましたが、リアルで大変だった為に更新が遅くなってしまう。恵吾のこのクエストが終わり少し話を書いたら、もう1人の方の話も書こうかと思っています。

その為にも出来る限り早く話を書いていきたいです。

技紹介

★1 『プラクテ・ビギ・ナル アールデスカット』 魔法使い達「魔法先生ネギま」

魔法初心者が練習で行う火属性の魔法。威力はライター程度の炎を杖の

先から出すだけだが、込めた魔力が大きければ威力は増す。

★2 『支配眼』 スヴェン「BLACK CAT」

目に見える全ての動きがゆつくりに見えるようになる。さらにその時

自分もゆつくりにはならず、普通と同じ速さで動ける。但し、肉体に掛かる負荷が大きい為、長時間しようできない。

★3 『セウシル』 ティオ「金色のガッシュベル」

自分の周囲だけでなく、任意の離れた場所にも発動できる。地上で発動すると、地面や障害物に合わせて形が変化し地中には貼れない。空中で発動すると球体になる。

★4 『ゴウ・バウレン』 ウォンレイ「金色のガッシュベル」

波動を帯びた掌底を繰り出す術。

★5 『リオル・レイス』 ブラゴ 「金色のガッシュユベル」
両手から螺旋状の2つの重力弾を放つ。螺旋状の為に対象を
えぐるようにダメージを与える。

★6 『ギガノ・レイス』 ブラゴ 「金色のガッシュユベル」
黒色の大きな重力弾を放つ

★7 『虚刀流一の奥義 鏡花水月』 虚刀流 「刀語」
7つある虚刀流奥義のうちの1つ。素早い拳底を放つ。

クエスト完了・・・と思ったら問題発生（前書き）

お久しぶりです。

色々と忙しく筆が進まずに時間が掛かってしまいました。

最近、お気に入りにして下さる方が増えてきて嬉しく思います。

これから多くの人に読んで頂けるように頑張っていきたいです。

クエスト完了・・・と思ったら問題発生

「はあはあ、つ、疲れた・・・」

恵吾は男が倒れると、ほぼ同時に地面に手を付き座り込んでしまった。

「大丈夫？」

フィーナが近付きそう聞いたが、恵吾は

「大丈夫。ちよつと疲れただけ・・・」

そう言つと、倒れこみそのまま眠ってしまった。

「う、うゝん、あれ？ 僕は確か……そっか、あのまま眠っちゃったんだ」

恵吾が目を覚ますと、周囲はまだ暗く、夜である事が分かった。

周りを見渡すと、

気絶したままロープでグルグル巻きにされた男達がいた。

「いきなり倒れたけど、大丈夫？」

恵吾の後ろから、フィーナが話し掛けてくる。

「はい。大丈夫ですよ、ディア……」

「フィーナで良い」

恵吾の言葉を遮ると、そう言った。

「じゃあ、フィーナ。……こいつらどうする？」

「普通は役人に引き渡すものだけど、今から街に戻ったらクエストに間に合わない。かといって、このまま連れて行っても邪魔になる。何にしても、厄介」

どうするか考えていると、

「どうするかな……あつ、そうだ。良い方法がある」

「本当？」

「うん。だけどその前に……おいつ、起きろ起きろ」

恵吾は落ちていた剣を拾い鞘にしまい、持ち主の男を起こそうと

何度か呼ぶが

起きないので、顔を軽く叩いた。

「ん、俺は、っ！ くっ、動けん・・・」

「目が覚めた？」

「お前は、ちっ、こんなガキにやられるとはな・・・」

男は悪態をついたが恵吾はそれを無視して質問をした。

「あなたに聞きたい事があります。まず何で僕達の荷物を狙ったの？ それともう1つ、

この剣をどこで手に入れたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

恵吾が質問するも男は何も言わずに黙ったままだ。

（仕方ないな。本当は使いたくなかったけど『サトリの能力』*1を使うか・・・）

「それじゃあ、もう1度聞きます。僕達の荷物を狙った理由、それと剣を何処で手に入れたんですか？」

男は黙ったままだったが

（はっ、何度聞かれようと俺がウィガレデイスの兵だなんて答えるかよ）

恵吾は男が心で何を考えてかを読んだので意味が無かった。

「なるほど、ウィガレデイスか・・・。だったらその武器はやっぱり・・・」

（なっ、何でウィガレデイスの名前が・・・それじゃあ、あの剣が・・・の武器だつて事がバレたんじゃ・・・）

男の心を読み、自分の予想と同じだった事が分かり溜息を付き

「やっぱりそうか。はあ、面倒な事になりそう」

「.....？」

そう呟いた。傍でフィーナが聞いていたが意味が分からず首を傾げた。

恵吾はこの男達をどうするかを考えた。ただの盗賊や物取りなら
フィーナが言った通り

役所に引き渡せばいいが、この男は別である。ならばどうするベ
きか考え

「そうだ、こうすれば良いか『影分身の術』*2」

恵吾が両手の人差し指と中指を交差させると煙と共に2人の恵吾
が現れた。

「それじゃあ、よろしくね」

「「あいよ」」

そう言い分身は男達を抱えると元来た道を戻って行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

恵吾が横に居たフィーナを見ると影分身達が行った方向を見たまま
完全に硬直していた。

心配になった恵吾が話しかけてみると、

「……………今のは何？」

少しの間の後、そう聞いてきた。

「ああ、今のは『影分身』って言って自分の分身を作る技だよ」

恵吾は何気なしに答えたが

「私は今まで沢山魔道書を読んだけど、その中に幻覚で作るのはあ
つても実体がある

魔法は無かったし、聞いた事もない。それにさっきの戦闘であなた
が使った魔法を見た事が無い。あなたは一体何者？」

「・・・・・・・・ごめん、それは言えないんだ」

恵吾が俯きながらそう言うと、フィーナは少し考え込んだが

「分かった、人には秘密にしておきたい事もある。だからこれ以上
は聞かない」

それを聞き恵吾は安堵し、フィーナの方を向くと既に荷物の所に
戻って行き

木にもたれ掛り眠ろうとしていた。その寝顔は、まるで子供の寝
顔のように穏やかで、

見ているだけで心が安らぐのを感じるのと同時に萌えた。

暫くして、眠ったようで寝息を立て始めたのを確認すると、ずっと見ていたいと

思ったがそれは不味いと、火の番に集中した。

それから特に何も起こらず日は昇り朝になり周囲は日の光で明るくなってきた。

「ん、・・・朝・・・」

日差しによつてフィーナは目を覚ますと、そう呟き周りを確認すると、

恵吾は起きていて火の番をしていた。恵吾はフィーナに気が付くと「おはよう、よく眠れた？」

「・・・（コク）」

そう聞いた。フィーナは頷き立ち上がると体を伸ばし眠気を払った。

「それじゃあ、ちょっと荷物を見ててもらえる？朝ご飯を探して来るから」

「分かった」

そう言い、森の中に入り木を調べ数種類の木の実を採取するとフィーナの元へ戻った。

朝ご飯として木の実を食べた後、荷物を持つと2人は再びブリエスに

向かって歩き出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

歩いている間、2人の間には会話は無く傍から見れば喧嘩をしているのか、仲が悪い

ように見えているだろう。だが、2人は別にそういった事は無い。

恵吾は女の子との

会話が苦手で、フィーナは会話をあまりするタイプではないようなので

必然的に2人の間には会話が無かった。恵吾は話しかけようとしていたが何を

話していいのか分からず困惑していたのだが、その時

「・・・聞きたい事がある」

「へっ?! な、何です?」

「昨日の戦闘を見る限り、あなたの強さはCもしくはBはある。なのにあなたは

Eランク、何故?」

「・・・・・・・・・・」

「それも言えない事?」

「うん、ごめんね」

「いい、それよりもお願いがある、私とパーティーを組んでほしい」「パーティーを?」

「(コク) 昨日の戦闘を見るとあなたは近接系が強い、私は遠距離が得意、戦闘ではバランスが良いと思う。ダメ?」

「そ、そんな事は無いよ。僕もフィーナとパーティーが組めたら凄く嬉しい、って思っていたから・・・」

恵吾が噛んだりしながらも、そう返事をするときフィーナは歩みを止めて

「そう、よろしく」

表情を変えずそう告げた。

そのまま歩き続けて行くと森を抜けると、その先には草原が広がっていた。

歩いている途中、先程のパーティーを組む、という話もあり少しだが恵吾はフィーナに

話し掛けやすくなっていた。そして、話しによって知った事はフ

イーナはDランク

風属性の魔法を得意としている。他の属性の魔法も使えるが風ほどではない。

これだけの事が分かった。

その後、草原を歩いていき2日掛けて目的の町ブリエスに到着した。

ブリエスは、ダルトニア程ではないが多くの人々が居て賑わっていた。しかし、恵吾は

町の雰囲気にな妙な雰囲気を感じた。

恵吾とフィーナが荷物を指定された場所に持って行くと

「ありがとうございます、確かに受け取りしました。それではこれが証明書です」

そう言い、何か文字が書かれた書類を渡された。これは確認書で、これをギルドに

持って行く事でクエストを完了したとして、報酬が支払われるのだ。

「それにしても、あなた方は道中に盗賊に会いませんでしたか？」

「盗賊に？・・・」

「ええ、実は数日前から配達を依頼した物が届かない、という事がありましてね。それで確認すると、どうやら盗賊に会い荷物を奪われる、という事がありまして中には殺されてしまった人も居るらしくて・・・」

それを聞き、恵吾とフィーナはあの男達の事なのでは、と思い顔を見合わせていると

「その所為で、町の人達もピリピリしているんですよ。それに、この町はウィガレディスのすぐ近くなので、いつ攻めて来られるかと警戒してまして・・・」

その後も暫く話し少しだが情報を得る事ができた。話しているうちに昼になったので

どこかで昼食を食べる事になり、料理屋を見付けると入り食事をした。

昼食を終えて、店を出ると外が先程よりもさらに騒がしくなっており、人々が

慌ただしく動き回っていた。何があつたのかと思い町の入り口まで行くと、

そこには見覚えのある顔があつた。

「マダスさん！」

多くの騎士達とその騎士達に指示をしていたのはダルトニアの第2騎士団団長の

マダス・アンドルトだった。恵吾が話しかけると周りの兵達は怪訝な顔をし、

警戒したがマダスはそれを制すると恵吾の方に近付いて来て

「驚いたよ、まさかもう此処に到着してるとはね。それにしても君にはまた助けられる事になったね。君が捕まえたあの男が居なかったら手遅れになつてゐる所だったよ」

「？ あ、あの、それってどういう・・・！」

そう言い掛けて、恵吾の頭に分身達もたらした情報が入ってきた。「……いえ、気にしないで下さい。実は僕も何か役に立てるのではないかと思つて急いで来たんです。間に合つて良かったです」

恵吾とマダスの会話を聞き状況が把握できていないフィーナは首を傾げていた。

マダスもフィーナに気付いたようで

「ところで、そのお嬢さんは？」

「彼女は、僕の仲間で・・・」

「フィーナ・ディアウエル」

恵吾が言つよりも先に今まで見ていたフィーナが、そう一言だけ

言つと

再び口を閉じた。

フィーナから視線を戻すと恵吾は

「それで、これからどうするんですか？」

「うむ、すぐにでも部隊を配置し、作戦を考える予定だよ。今回は騎士団だけでなく、ギルドからも募集したからかなりの数になるんだ」

恵吾はそれを聞き、装備が整った騎士達だけで無く装備がバラバラの人達が多く居た

事に納得がいった。

「それで、恵吾君も参加するんだろう？」

「……ええ、僕としても何とかしたいですから」

「そうか。それじゃあ向こうにギルド用の場所がある、そこに向かつてくれ」

「わかりました。それじゃあ」

そう言い恵吾はマダスと別れフィーナと共に他のギルド員が居る場所に行った。

向かつている途中、

「さっきのどういう事？」

「さっきのって……マダスさんの事？」

「それもある、何処であの人と知り合ったの？それにさっきの会話、どういう事？」

フィーナに、一気に沢山の事を聞かれたので、とりあえず会話の事について

話す事にした。

「ああ、実は『影分身』は消えると見た事や聞いた事が僕に分かるようになってるんだ。それでさっき分身達が消えて状況が分かったんだ」

「……今はどういう状況？」

「捕まえた男はウィガレデイスの兵だったんだ。それで、あの場所

で盗賊紛いの事をしてたのは、この町を攻撃するにあたってこの町にある資材を少しでも減らして少しでも有利に運ぶつもりだったんだ。侵略して来る日時は分からなかったけど、いつ攻めて来ても良いように派遣したみたい」

「・・・・・・・・」

「フィーナは無理して付いて来なくても良いんだよ？」

「（フルフル）パーティーは一緒に戦うもの」

「あ、ありがとう」

そのセリフを聞き、顔がニヤケそうになるものの必死に我慢し平静を保とうと

しているが、我慢しきれておらず、僅かに顔がニヤケていた。

指定の場所に様々な人達が居て、武器の手入れをしている人も居れば、仲間と話して

居る人、等々々だ。恵吾は周囲の人達を見ていた所為で向かいから歩いて来た人と

ぶつかってしまった。

「あつ、すみません」

「ああ、手前どこに目を付けてやがる。いてえじゃねえか」

男はそう言つと、恵吾の胸倉を掴むと怒鳴ってきた。その男の体は大きく、

武器や鎧は派手で厳つい顔をしている。恵吾は面倒な奴に絡まれてしまった、と思い

適当に終わらせようとしたが男は

「ここは戦場なんだぜ。テメエみたいな餓鬼が来る場所じゃねえんだよっ！」

恵吾にそう怒鳴って来た。

（はあ、面倒くさいなあ。こういう人とは関わりたく無いんだけど・・・）

そう思っていると、

「ギルドメンバーの方達、私はラーキ・ムルフィス。騎士団副団長であなた達に指示を行う者です。さっそくですがあなた達には騎士団の左翼部分を担当してもらいます。細かい指示については時機を見て行います。それでは来て下さい」

それを聞くと男は

「ちつ、まあ良い。どうせ手前みたいな奴は戦闘になったらすぐに死んじまうんだからな」

そう言い恵吾の服を離すとさっさと行つた。恵吾は服を直すと溜息を付き

「はあ、何か戦う前から疲れたな」

そう言つと、戦場に向かう事にした。戦場に向かっている方向を見ると草原が

広がっており、山が奥に見えてる。どうやら山の向こう側に敵の国があるようだ。

暫く歩くと、到着したのか騎士団は素早い動きで陣形を組み始めた。恵吾達の方には

指示はまだ来ていない。そのまま、少し待っていると先程の人が来て指示を伝えた。

内容は詳しい事は言われず、敵が来たら最初は遠距離から攻撃して、近付いて来たら

接近戦を行う、それだけだった。それを聞き恵吾はそんな内容で大丈夫か、と不安に

なつたが、フィーナ曰く

「正式な人達ならともかく、雇われた私達だと敵に内容がバレる可能性がある。だから、詳しくは言わないし、本隊から離れた所に配置された」

との事。

それから、3日は何も無く時間だけが過ぎていった。しかし、4日目の朝に事態は

動き出した。

本陣で戦いの準備をしていたマダスの元に、先行させていた兵から連絡が入った。

「報告します、敵を確認しました。およそ2時間後に本陣と戦闘可能距離まで近づいて来ます。敵の兵力は約2万、その内、魔法士は約8千、他は装備を見た限り歩兵と騎兵、弓兵がそれぞれ4千ほどです」

その報告を聞きマダスは苦い顔をする

「不味いな、私達は1万3千、おまけにその内の3千はギルドの間……こんなにも数で攻めてくるとは思わなかったな」

そう言い、周りに居た兵に向かって指示をだした。

「全軍に通達、2時間後に戦闘が開始。指示に従い移動し戦闘準備を行え」

「……はっ」

周りに居た部下達は返事をする、それぞれ連絡の為に動き出した。

その後、他の兵達やギルド員に指示が行き渡ると、自分達の配置に着き後は開戦を待つだけになった。

それから約2時間後、先程の連絡通り丘の向こうから敵が見えてきた。

それを確認した瞬間、恵吾に緊張が走る。

（これから本当の戦い……殺し合いが始まる。覚悟はしてたけど、やっぱり怖い。けど、やらない訳にはいかない、か）

そう覚悟をしていると、横からフィーナが

「大丈夫？」

「ははっ、正直なところ全然大丈夫じゃないかな。僕が元居た所じや殺しなんて滅多になかったから、緊張してるし、怖い……で

も逃げる訳にはいかない！」

「・・・そう、それなら私があなたを守ってあげる」

「！・・・ありがとう」

フィーナの言葉を聞き少し心が安らいだ恵吾は1度深呼吸を
すると、これから来る

敵達の方を向き意識を集中した。

迫ってきた敵を確認すると、兵達が着ている鎧や持っている武器
は見た事がある物
だった。

中央に居る兵達の装備は緑を基本とし紫や黄が混ざった色をし、
肩当ては半球体で

腰回りにはスカートの様になっており腕や足の装備はゴツゴツし
ていて重厚な

造りをしていた。持っている武器は銀色で逆五角形の銀色の盾と、
リボルバーが
付いている槍を装備していた。

（武器は近衛隊正式銃槍*3に防具はガンキンUシリーズ*4か・
・。それに）

中央の右側に居る部隊は、黄色に青色が所々にあり肩や腕、等の
全身に牙や爪の

様な物が付いている鎧を着て、背中にはそれぞれ剣を2本ずつ背
負っていた。

（レックスSシリーズ*5に双剣か・・・んで）

左側にはオレンジ色を基本とし所々からは刺の様な物が出ている
鎧を身につけ

右手に盾を持ち腰に剣を持っていた。

（ベリオUシリーズ*6に片手剣か・・・）

陣形を見る限りでは、左右の部隊は動きが早いようになっており、
中央は遅いが

守りには適しているようだ。恵吾が考えていると、味方側の中央、つまり正規の

騎士部隊が居る所から兵達の咆哮が聞こえた。その後、数人がこちらに來ると

「これより戦闘に入る、我らの指示を聞き行動するように」

それを聞き遂に戦が始まる・・・恵吾は改めて覚悟を決めた。

「この左翼は遠距離からの攻撃を行いながら素早く前進する。その後、敵が移動速度を上げて來たら、一時下がるように。合図はこちらで行う。進軍開始！」

その声と共にその場に居た全員が速度を上げ敵に向かって進みだした。

クエスト完了・・・と思ったら問題発生（後書き）

今回は技等の他に武器についても書いていきます。

*1 『サトリの能力』 サトリ（ぬらりひよんの孫・地獄先生ぬ〜べ〜）

他人の思考を読む事が出来る能力。表層意識だけでなく深層心理まで読む事が出来るので隠し事は出来ない。

*2 『多重影分身の術』 ナルト 上忍（NARUTO）

自分と同じ姿の実体を持つ分身を生み出す能力。ただし、1撃殴られたり

するだけで、消えてしまう、という欠点がある。分身体が消えるとそれまで

見聞きした事や、経験が本体に蓄積されるので、修業においては効率が良い。

*3 『近衛隊正式銃槍』 ハンター（MONSTER HUNTER PORTABLE 2ND）

銀色のガンランス。機構部分から爆発を起こす「砲撃」と威力の高い「龍激砲」を

放つ事が出来る。

*4 『ガンキンUシリーズ』 ハンター（MONSTER HUNTER PORTABLE 3RD）

「ウラガンキン亜種」の素材から作れる防具。防御面ではそれなりに高い。

*5 『レックスシリーズ』[㊦] ハンター (MONSTER H
UNTER PORTABLE 3RD)

「ティガレックス」の素材から作れる防具。スタミナが切れにくくなる。

*6 『ベリオウシリーズ』[㊦] ハンター (MONSTER H
UNTER PORTABLE 3RD)

「ベルオロス亜種」の素材から作れる防具。気配を消せるようになるので、敵に気付かれにくい。

開戦と再開と激闘

恵吾達が居る左翼が前進していき少し近付いた所で

「今だ！放て」

その合図と共に前の方に居た人達は魔法を使える者は魔法を、弓を持つている者は

矢を放った。だが、それと同時に敵も同じ様に弓兵が前に出ると弓で攻撃をして来た。

恵吾とフィーナが居るのは左翼の中程なので、まだ、攻撃は届いて来ていないが

既に血の匂いが漂ってきた。それに恵吾は顔を顰めて足が止まりそうになるが、

頭を左右に振り、深呼吸を行い気持ちを落ち着けると、敵の方に向き直った。

暫く、打ち合っていると敵が弓兵を後ろに下げ歩兵が移動速度を速めて突っ込んできた。

「今だ、全員反転。全速力で下がれーっ」

その声を聞くと、素早い者は直ぐに走り始めたが、遅い者は未だ攻撃をしていて

行動が遅くなっている。その所為で攻撃が弱くなり、何人かは魔法もしくは矢の

餌食になり命を落とした。それでも下がると、突っ込んできた敵右翼に

味方中央の部隊から騎兵が攻撃を加えた。

「突撃ーっ」

横から敵の攻撃を受けた為に耐えきれず、横に居た兵は馬に踏みつぶされたり

槍で貫かれて命を落とした。突っ込んできていた部隊は速さを重

視した

部隊の為、防御は薄く守り切れてはいなかったが、残っていた兵はすぐに

状態を立て直し、反撃に出た。

「わあああーっ」

「おおおお」

先程まで恵吾達が居た場所では兵達の戦いが始まっており怒号が聞こえてきた。

それを見ていると、指示をした兵が

「次に部隊を2つにする半分は左に移動し、敵の本隊に攻撃を加える。もう半分は反転し再び敵に遠距離魔法を放つ。展開上、左に行く者は近接系の者が行くように。では、行動開始」

それを聞き、ギルド員はすぐに動き出した。あまり戦闘を行った事の無い者は

その指示に戸惑いすぐには動けなかったが、ベテランの者はすぐに動き出した。

戸惑っていた者も周りの様子を見て行動した。

「私達は・・・」

「僕は遠距離魔法も使えるから問題ないよ」

「(コクン)」

フィーナと話し合い反転し攻撃する部隊になる事にした。

戦場を見ると、敵の中央に居た部隊が味方の中央に対して矢を放った。矢の数は

そのまで多くなく、防げられると思われた。しかし、打ち出された矢は頂点に

昇った瞬間・・・大量に分裂し数十倍になり雨のように降り注いだ。

突然の事に驚き防ぐ事が出来た者もいたが、ほとんどが全身に矢を受けて命を

落としてしまったり、生きていても重傷を負ってしまった。

「無事な者は負傷した者を連れて下がれ。右翼は半分にし中央の補助に入れ」

本隊ではマダスは部下達に指示をしていた。

「魔法隊、まだ駄目か?!」

「もう少しです。もう少しだけ時間を稼いってください」

「くっ、全員、今は被害を最小限に抑えるように行動せよ」

「はっ」

兵達は返事をする、他の部隊に指示する為に散会した。

（このまま、何とか時間さえ稼げれば範囲魔法で一氣に有利に運べる。後は、あの男が出ない事を祈るか・・・）

恵吾達がいる所では一旦停止し全員が準備をできたところで再び前進を開始した。

恵吾は先程とは違い隊の前に立ち準備をしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「戦場が怖いのか？」

口を開かず緊張した面持ちの恵吾を見てフィーナは尋ねた。恵吾はそれを聞き

「怖いよ。さっきと違って前だから戦闘になれば最初に敵と戦う事になる。そうなれば、僕は沢山の人を殺すことになる、それが怖いんだ」

「自分が死ぬのは？」

「僕は自分が死ぬとは思ってないよ。そういう魔法があるから。だからそれ以上に人を殺すって事がすごく怖いんだ・・・・。でも、戦うって決めた以上は戦うし敵も殺す」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞きフィーナは何も言わなかったが、この時しっかりと見ていれば

彼女の僅かな表情の変化に気付いた者もいたかもしれない。

緊張したまま待っていると

「これより前進する。その際、走りながら敵に向かって魔法で攻撃を加えながら進軍するように……行けーっ」

「うおおーっ」

それを聞き恵吾も含めて全ての人間が走り出した。

（そろそろか……これから先は2度と戻れないな……それでも）

敵の所までもう少しの位置まで来た時に恵吾はそう考えた。

此処まで来た引き返せない、そう思った時、恵吾の心臓は今にも爆発しそうなほど

鼓動が速くなっており、息も荒くなっていた。

「今だ撃て！」

味方の騎兵が下がったのを確認すると指示をした。

その声と共にフィーナを含めた周囲の人間が魔法を撃った。恵吾もそれを見て

「うおおおお、『ヴァルカンショック・イグニション』*1」

直径2メートルほどの火の塊を出し、それを敵に向かって放った。他にも岩の塊や竜巻、様々な物が敵に向かって飛んで行っている。

だが敵も

黙ってやられるだけではなく、中には魔法で相殺したり武器で切り裂く等を

して対応していた。しかし、防げなかった者は攻撃を受けて切り裂かれたり

焼かれたりして周囲には血や人の焼ける嫌な臭いが漂ってきた。

「……うつ、うつ」

恵吾は吐きそうになるが、それに耐えて前を向くが眼前の状況に意識が

飛びかけて足元が振ら付くが

「気を付けて」

横からフィーナが支えてくれたお陰で倒れずにすんだ。

「・・・ありがとう」

そう言くと再び前を向いた。

「・・・・・・・・」

それを見てフィーナは何か言いたそうだったが、少しすると同じ様に

目の前に居る敵に目を向けた。

「おおおー」

その時、敵の横から再び怒号が聞こえて来た。確認するともう一方に行っていた

人達が横撃を加えていた。前方に居る恵吾達に集中していた所為もあって

混乱が広がっていた。恵吾達はそのまま進行すると敵は反転して逃げだした。

それを追いかけようとしていた時、味方の本隊から巨大な炎の塊が敵に向かって行った。

恵吾達が攻撃を加えていた時

「マダス隊長、範囲魔法の準備完了しました」

その報告を聞くと

「よし、私の指示と共に発射せよ」

「ハッハッ」

「これで終われば良いが・・・」

それから少しし、戦場を見ると味方が僅かに押し始めていた。それを確認すると

敵が集中している前線部分に向かって

「今だ、『メテオ・ラ・ファス』発射」

それを合図に数十人の魔法士が同時に両手を前に出すと15、6メートル程の

巨大な炎の塊が出現し、敵に向かって放たれた。

「うわぁー……っ」

「ぎゃぁぁぁ」

それを確認した敵は直ぐに対応しようとしたが、それよりも早く着弾して

周囲に爆炎と爆風が広がり1撃で何百人も倒し、さらに爆風に煽られて

負傷した者も大勢出た。それを見逃さずマダスは

「第2射、『グランド・ラ・パルリオ』発射」

次に後ろに居た数十人が前に出て両手を地面に付けると敵の前の地面が

盛り上がり地面から石や砂で固められた高さ6、7メートル程の槍が

現れた。先程の魔法で混乱している所に追撃で放たれた魔法に完全に隊列も何も無くバラバラになっていた。

「引けーっ、引けーっ」

その声を聞き敵兵は退却を始めた。それを見逃さず、マダスは追撃を

掛けるように命じた。それを聞き正規兵、ギルド員、関係無く前進し

追撃を掛けようとした。状況は誰が見てもこちらが優勢で負けるという事は

誰の頭にも無くマダスも勝利を確信していた。

だが、その思いも直ぐに消された。

「わぁぁー……っ」

突然の事に兵は何が起こったか分からず自分が死んだ事すら気づけない者も

居たほどだった。

「な、何が起こった」

前線付近に居た小隊長がそう聞くと、

「あ、あいつが、あの男が・・・」
「っ!!」

それを聞き小隊長だけで無く周囲全体に緊張が走った。
そして、砂煙が晴れると先程まで兵達が居た場所には大量の剣や
槍が突き刺さっており

そこには1人の男が立っていた。それを見た瞬間兵達が

「力、力、カズキだーっ!!」

「あ、悪魔の剣士っ」

様々に驚き恐怖しだした。

「お、落ち着け、落ち着いて・・・」

小隊長は何とか周囲の兵達を落ちつけようとしたが出来なかった。
何故なら男が

腰に差していた長い日本刀*2に手を掛けた瞬間

チンッ!

その音と共に空間に歪みが発生し、地面には5本の切れ目があり、
そこに居た

全員が切り裂かれ死んでいたからだ。

それにより生きていた他の兵達は一目散に逃げ出し先程までの有
利な

状況は一変していた。前線での騒ぎが分かり、恵吾は何かあった
のか『白眼』で

確認すると、こちらに向かっている1人の男が見えた。男は赤い
マントを着て

黒色のジャケットとズボンを身に着けていた。それを見た瞬間恵
吾は

男の居る所まで一目散に走り出した。隣に居たフィーナが恵吾に
何か言った

ようだったが、恵吾の耳には聞こえていなかった。

「やっぱりか・・・まずいな、これじゃあダルトニアに勝ち目は無

いぞ」

恵吾が全速力で走っていると前線が見えてきた。もっとも前線といても

かなりの被害を受けて既にボロボロの状態であった。こちらら魔法や矢で反撃をして

いるが全て両手に構えた黒と白の銃*3によつて撃ち落とされた。「くつ、まさかあの男が出てくるとは……」

マダスは状況の圧倒的不利さを、どうすれば良いか思案していたが、

「た、隊長、もうすでに我等の近くまで来ております。このままでは……」

「どうする、範囲魔法はまだ使えない、引くしかないのか」
そう言っているとマダスからも目視出来る位置まで一輝が来ていた。

一輝は腰の剣に手を掛け、抜く構えをした。それを見た誰もが死を悟った。

そして、剣が抜かれる瞬間

「『チャージル・セシルドン』*4」

巨大な盾が出現し、その場に居た全員を守った。もっとも、盾には7本の

線によつて挟まれていたが。

「はぁはぁ、間に合った……のか？」

そこには肩を揺らして息も絶え絶えの恵吾が居た。それを見たマダスは驚き

「恵吾君、何をしているんだ！下がるんだ」

だが恵吾はマダスの方を向くと首を横に振り前を見付めた。

「……久しぶり、かな」

「っ！ 何で……」

恵吾が話しかけると一輝は驚き目を見開いた。

（一輝がそっちに居る理由がよく分からのだが。実はこの前、襲

つてきた男の頭の中を読んだんだけどいまいち分からなくてね。あ、ちなみに『念話』*5使ってるから頭の中で話したい内容を思い浮かべれば良いから)

(こんな感じか?)

恵吾に聞いて一輝はやってみた。

(うん、それで良いよ。それで早速本題に入るけど、何でそこに居るの?色々な武器や防具を持っているって事やけど・・・)

(まあ、色々と面倒な事になってな。一応は異世界から来た勇者みたいな状態なんだ・・・)

それを聞き恵吾は

(あゝ、それはご愁傷さま。一輝って勇者とか英雄とかあんまり好きじゃないのにね)

そう言うつと一輝は疲れた様子で答えた。

(まったくだ、でも、そのお陰でウィガレデイスの姫様と知り合いになれてな、それで・・・)

(・・・ちょっと待て、お前まさか・・・)

それを聞き恵吾は何となく答えが分かりつつも

(ああ、惚れた!)

少し呆れつつも自分も同じ様な感じなので強くは言えず

(・・・まあ、僕も惚れた子が居るから人の事を言えんが)

(そうか・・・んで、どうする?この状況)

一輝に聞かれ恵吾は本来なら止めるべきなのだが、力を手に入れて未だ満足に発揮する機会が無かった事もあり恵吾は

(とりあえず、戦う?正直言ってワクワクしてる)

そう答えた。

(・・・俺もそう思ってた)

一輝はそれを聞き嬉しそうに言った。そして、2人は一呼吸おき「んじゃ、思いつきり行くぞ」

「上等、来い」

2人は口でそう言いつつも『念話』で

（ちゃんと加減しろよ）

（分かってる。そっちこそ危険すぎる物は出すなよ）

そう打ち合わせた。

そして、恵吾は後ろに居たマダス達に

「早く下がってください。巻き込んでしまつかもしれません」

「・・・分かった」

「隊長！」

「下がるんだ。見ただろ、彼はあの攻撃を防いだんだ」

「・・・分かりました」

そう言いマダスは全員に指示をし、全員が下がって行くのを暫く待ち、それを確認

すると一輝は金色の鍔に柄が青色の西洋剣*5を出し構えた。

「『約束された（エクス・・・）』」

そう言つと、剣が金色に輝き始めた。

「『クロスカルセイド・・・』
『聖逆十字』」

恵吾が右手を引くと強烈な電気が周囲に流れ始めた。

そして、

「『勝利の剣』*6
カリバー-----
デリンジャ-----」

「『雷裂波』*7」

一輝の剣から光と共に衝撃が恵吾に向かって放たれた。恵吾も右手を前に出すと

巨大な電撃の鳥が一輝に向かって放たれた。2つは間でぶつかり合い、

目も眩む程の光と地面を揺るがす程の衝撃が起こった。それには離れた場所に居た

両国の兵達にまで届いた。

光が止まない内に一輝は跳び恵吾の上まで行くと、再び腰に差した日本刀に

手を置くと

チャンッ

鏝鳴りがし、地面に8本の斬撃の跡が残った。しかし、そこに既に恵吾は居らず

一輝の後ろに回り、

「『エクスキューションソード』*8」

右手に光る剣状の物質を纏い振り下ろした。しかし、一輝はそれが当たる前に

既にその場には居らず前方に居た。恵吾が一輝の方を向くと背中部分には紅い機械状の

羽の様な物があり、両腕と両足にも同じ色の機械の鎧を装備していた。

「っ！ 紅椿*9か・・・いつ！」

右手に持った刀で突きをすると、先からレーザーが出て恵吾に迫った。恵吾はそれを

回避するもバランスを崩してしまうと、一輝はそれを見逃さず

「はあっ！」

左手の刀を数回振ると斬撃がそのまま恵吾を襲った。

「くっ、『マ・セシルド』*10」

恵吾は空中に円系のピンク色の盾を出しそれで防いだ。だが、盾が消えた時には

間合いを詰めており両手の刀を振り下ろしてきた。恵吾がそれを交わすと、蹴りが

迫って来た。それも紙一重で交わした、そう思ったが、踵部分が展開しエネルギーの

刃が出て恵吾の体を切り裂いた・・・かのようにみえたが、それは残像で恵吾は

真下に居た。

「『龍拳』*11！！」

そう言つと、全身に纏っていた魔力が金色の龍となり、恵吾と共に一輝に

向かって突っ込んで行った。

開戦と再開と激闘（後書き）

今回、ようやくもう1人の主人公である一輝が登場しました。
何だか長いようで短かったと思います。（笑）

恵吾と一輝が『念話』によって会話をしているシーンなのですが、
もう少し上手に書きたかったのですが、中々上手くいかず、
少し変になってしまいました。一輝の現在の立場は本編で語られたように

勇者扱いされています。もっとも、本人の希望でその事を知っているのは

国の上層部の数人だけ、という事になっています。

一輝の持つ武器の形状を説明で書いたのですが、それでは分かりにくい

と思い、『紅椿』は恵吾に無理に言ってもらいました。

これからも、同じ様な事があるかもしれませんが、温かい目で見守って

下さい。

技・武器紹介

*1 『ヴァルカンショック・イグニション』 照山 ブレイド
(NEEDLESS)

高温の巨大な火球を相手に向かって放つ。

*2 『長い日本刀』 バージル (Devil May Cry)
y)

本編で何度か居合切りの要領で使っていたのはこの刀。

名前は『閻魔刀』^{やまと}という名前。空間ごと斬り裂く能力がある為、刀でありながら遠距離攻撃が可能。一瞬で複数回攻撃する

事ができる。

★3 『黒と白の銃』 ダンテ (Devil May Cry)
名前は『エボニ&アイボリー』 黒色と白色の大型2丁拳銃。

★4 『チャージル・セシルドン』 ティオ (金色のガッシュ
ベル)
下半身が巨大な盾の女神を召喚する。女神の胸には水晶があり、

誰かを

守りたい、という思いが強ければ強い程、強度が増す。破損しても修復する

する事が可能。

★5 『念話』 魔導士 (魔法少女リリカルなのはシリーズ)
今回の念話は、なのはシリーズの使いました。他の作品にも同じ様な技はありましたが、今回はこちらを使いました。理由は何か動きをしたりせずに、ノーモーションで行えるからです。

★6 『約束された勝利の剣』 セイバー (Fateシリーズ)
アーサー王の持つ剣。真名を解放する事で、魔力を“光”に変換して

斬撃として放つ事が出来る。

★7 『聖逆十字雷裂波』 真弥 (私の救世主さま)
強烈な電撃を鳥の形にして相手に放つ技。

★8 『エクスキューショナーソード』 エヴァンジェリン (

魔法先生ネギま！)

個体や液体等の物質を無理矢理に気体に相転移させて相手を消滅させる技。

これを受けると対象は塵も残らず消える。

★9 『紅椿』 第 (インフィニット・ストラトス)

両腕型脚に展開装甲というのを装備しているので、そこからエネルギー刃

を出して、攻撃する事が可能。また、それを防御に使う事も可能。

飛行速度も速く高速戦にも優れている。

右手に持っている刀は雨月、刺突を行うと先からレーザーが放たれて、

左手に持っている刀は空裂、斬撃をエネルギー刃として放てる。

★10 『マ・セシルド』 ティオ (金色のガッシュベル)

金色の淵の中にピンク色のエネルギーがあり、中央には2枚の白い羽状の

装飾があり、円形をした盾。かなりの強度を誇っており、銃弾程度では

ビクともしない。

★11 『龍拳』 悟空 (DRAGON BALL)

本来は気が金色の龍となる。全身に気を纏い相手に高速で突っ込み

貫き消滅させる技。

ちなみに、龍は東洋のもで、西洋のドラゴンではない。

決着、そして告げられた。

『龍拳』により加速した1撃で一輝は倒されたかと思ったが、

「『熾天覆う七つの円環』^{ロー・アイアス}*1」

一輝の前に大きな赤い花弁状の盾が7枚出現し恵吾の攻撃を防いでいる。

だが、花弁はすぐに亀裂が入り砕けた。しかし、一輝は碎けるまでのその僅かな

時間の内に離脱すると地上に着地した。そして、『紅椿』を消すとスーツケース*2を出した。

すると、ケースが原形を留めない程、変形して肩で担ぐ程巨大なミサイルランチャーに

なった。

そして、一輝が引き金を引くと、大量のミサイルが発射された。

「『デibold・ジー・グラビドン』*3」

だが、恵吾の前に複数の球体が入った巨大な球体が出現し、ミサイルを吸い込むと

ミサイルは球体の内部で爆発せずに消滅した。

恵吾はそれを確認すると地上にゆっくりと降りて、一輝を見据えると、一呼吸おき

一瞬で間合いを詰めた。そして、攻撃に移ろうとしたが、一輝は柄に髑髏の

装飾が施された剣*4を出すと、それを振り下ろし切り掛かって来た。

「いつ！」

恵吾は急停止して、ギリギリ交わす。だが、一輝は休まずに続けて連続で

剣で切り掛かる。何とか恵吾は交わしながら『月衣』に収納してあった以前、

盗賊から奪った刀を取り出すと構える。すると剣が光に包まれていき*5

切り掛かって行つた。

「はああああああつ」

「うおおおおおつ」

そして、2人は持つ剣での高速の切り合いが始まった。その切り合いは

お互いに一步も引かない。

恵吾が上段と下段の連続斬を放つと、一輝はそれを弾き今度は逆に、左右からの連続撃を放つ。恵吾は、それをかわすと体に向かって連続の突きを撃つ。

だが、一輝は剣で全て防ぐと、そのまま反撃に出た。

既に何十合打ち合ったか分からない程、2人の剣戟は続いている。お互いに一步も

引かない。切り合いによって2人は体中に切り傷を負い血が流れている。地面は2人の

流した血によって、真っ赤に染まっている。だがそれでも、2人は恐れる所か、

その顔には笑みさえ浮かんでいた。

「うおおおおー」

「んああああー」

2人の戦いは、このまま永遠に続くのかと思われたが、

「うおおおおー」
互いに振り抜いた1撃によって恵吾の刀は折れ、一輝の剣は後方に吹っ飛ばされた。

「……………」

2人は肩で息をしながら、暫く睨みあっている。

（そろそろ、終わりにしない？さすがに疲れたし、体中が痛い・・・）

惠吾の提案に一輝も

（そうだな、それじゃあ、またその内に・・・）

同意した。そして、2人は後ろを向くと、其々の陣営に戻って行った。

戻ると同時に一輝は倒れこむと、衛生兵に連れられて行っている。惠吾は、戻ると一輝と同じ様に倒れかけたが何とか両足で踏ん張ったが

気を失い倒れてしまった。

「……ん、ここは？ ……っ！ あ、あたたっ……」

惠吾は目を覚まして起き上がろうとしたのだが、体中に走る痛みで一氣に目が覚めた。

痛みに苦しみながらも、周囲を確認すると、誰も居らず広い部屋にあるベッドに

寝かされていたようだ。さらに、体中に包帯を巻かれているので、治療が

終わってからベッドに寝かされた、という状況のようだ。体をゆっくりと倒し、

暫く待っていると、マダスが数人の兵と共に入って来た。

「あ、マダスさん」

「……………」

天幕に入って来たマダスは、難しい顔をして何も言わず、惠吾の方を見ている。

「……？ あの、どうしたんですか？」

それを聞きマダスと兵は姿勢を正す。そして、

「御気分はよろしいでしょうか？ 何かあればお申し付け下さい」
そう告げた。恵吾はそれを聞くと、

「はい？ あの、なにが……」

訳が分からず戸惑ってしまった。

「あなたは、ウィガレディス最強と言われている男と互角に渡り合われました。ですので、こちらとしても最大のおもてなしを、させて頂きます」

それを聞き納得はしたが、恵吾はむず痒くなり、

「……いや、あの、普通にしてくれませんか？ なんだか、逆にこちらが緊張してしまいますので……」

「……では、そうさせてもらおうよ？」

マダスは少し考えると、納得したようで以前の話し方に戻った。

「はい、それで、一体何がどうなったんですか？」

「あの後、気を失ってしまった君をこちら陣に連れて来て治療をしたんだ」

「そうですか？ あれからどうになりましたか？」

先程から気になっていた事を聞いてみると、マダスは落ち着いた口調で

「君が気絶してから2日たっている。ウィガレディスの兵達は撤退したよ。兵の損害もそうだが、それ以上に士気が下がってしまって、戦線を維持できなくなったようだ」

そう言った。それを聞き恵吾は少し安心した。

「……これからどうなるんですか？」

「ああ、私達は3部隊を残して、一旦ダルトニアに戻るつもりだよ。ははっ、なんだか前にも同じ様な事があったね」

それに釣られて恵吾にも笑みが浮かんだ。

「……それで、君にはすまないが、もう1度城に一緒に来てもらおうよ。こちらとしても、あの男とともに戦える戦力を無視しておく事は出来ないからね。先日のように簡単にさようなら、という訳に

はいかないんだ」

「…分かりました。いつ頃に出発しますか？」

「ふむ、兵の準備があるので・・・１０日は掛かるな。何せ重傷者も多く居る。今、満足に動けるのは少ないからな」

それを聞き、なるべく早く移動したい恵吾は

「…なら、怪我人の所に案内してください。僕が治します」
そうマダスに言った。

「ありがたいが、その前に君は自分の怪我を治したほうが……」

「それもそうですね。『ジオルク』*6」

だが、マダスは申し訳なさそうに断ったので、自分の治療の為に恵吾が魔法を発動させた。すると、体中の怪我がすぐさま消えていき、

あっという間に全治した。

「…………君には本当に驚かされる。あれだけの怪我を、こつも簡単に治すとは。これなら兵達の治療も期待出来そうだ」

部屋を出て廊下に出ると多くの人達が忙しく働いている。

ここは、ブリエスにある宿泊施設で、恵吾が眠っていたのは、最上級の部屋だった。

マダスに連れられて、歩いて行くと大きな扉の前に着いた。扉を開けて中を見ると、

大勢の怪我人が寝かせられている。ここは普段なら、宴会等を行う大広間なのだが、

現在は緊急で怪我人のほとんどが、この部屋に運ばれたようだ。

怪我人の他には治療を行っている者や、怪我人の仲間なのか話しかけている者等も

いる。

「見ての通り、人手が足りない上に怪我人が多くてな……」

「分かりました。それじゃあ『シン・サイフォジオ』*7」

呪文を唱え、両手を上に向けると4本の剣が十字型に展開して中央に羽の付いた物が

出現した。それと同時に、周囲に光が満ち始めた。光が部屋中に行き渡ると、先程まで

苦しんでいた兵達が穏やかになっていき顔色も良くなっている。

そして、寝ていた兵達から声が上がった

「う、腕が動くぞ!」「体の痛みが消えた……」「こ、こいつは一体……」

それを見たマダスは、

「……もう驚く事は無いと思っていたが、どうやらこれからも色々との準備が要りそうだな……」

誰に言うでもなく、そう呟いた。マダスの周りに居た兵達も、ただ茫然とこの状況に驚いているようだ。

その後、怪我が治った者達は戻る為、物資の片付け等の準備を始めた。

そんな中、恵吾はマダスの許可を得てフィーナを探す為に、陣営を歩きまわっている。

だが、人数が多い所為もあって中々見付けられないでいる。おまけに、周囲の人間の

ほとんどが恵吾を見ると、仲間内でコソコソと話をしたり、目を合わせないように

しているので、誰かに聞く事も儘ならない。

そのまま。暫くすると、見た事のある後ろ姿を見付けた。

「フィーナ、良かった中々見つからないから、どうしようかと思ってた」

「……………」

恵吾が近付き話しかけると、フィーナはこちらを向きはしたが、何も言わず恵吾を

ジツと見ている。

話しかけてから、少しの間、気まずい空気が続いているが、恵吾はそれに耐えられなくなり

「あ、あの、フィーナさん？………」

「正直に答えて。あなたは一体何者？」

表情は何も変わっていないが、その声には威圧感が含まれている。

「…分かった、けど、ここだと話しにくいから場所を変えても良い？」

「（コクン）」

フィーナは頷くと、歩きだしたので恵吾も着いて行つた。

暫く歩くと、ブリエスから南にある草原に着いた。周囲には誰も居ない。

「ここで良い？」

「そうだね、それじゃあ、何から話そうかな……。ねえ、フィーナは異世界、もしくはパラレル・ワールドって言葉を聞いた事がある？」

恵吾はフィーナに聞いてみるが、

「…（フルフル）」

知らないようだ。恵吾は少し考えると、

「そっか、じゃあそこから話さないとな。異世界っていうのは、ことは違う異なった歴史を進んだ世界、もしくは根本から違う世界、って事かな」

その説明を聞くとフィーナは

「……… なんとなく分かった。」

そう言った。

「それで、僕はその違う世界から来たんだ」

恵吾の話聞き終わると、フィーナは黙ったまま暫く考え込んでいたが、

「…… 普通なら信じられない。でも、あなたの使う魔法は見た事

のないものばかり。だから信じる」

そう告げた。それを聞き恵吾は信じて貰え、嬉しくなった。

「……あなたに聞きたい事がある。あなたの魔法の中にどんな病気でも治す事が出来る魔法は存在する？」

「？ まあ、いくつか心当たりがあるけど……」

突然の質問に、疑問を持ったが、素直にフィーナにそう告げた。それを聞くと

フィーナの表情が明らかに変わった。

「っ！ お願いがある。治療をして欲しい人が居る」

そして、今までで最も大きな声で恵吾にそう言つと、頭を下げてきた。恵吾はそれに

少々驚いていると

「お願いっ！ 叶えてくれるなら、私に出来る事は何でもする」

「な、何でも……」

何でもする、というのを聞き恵吾はフィーナの方を見たが、すぐに首を振り

一旦、落ち着くと事にした。

1度、深呼吸をして落ち着いた。そして、

「仲間なんだから、そんな、なんでもする、とか言わなくても大丈夫だよ」

恵吾が冷静に告げるとフィーナはキョトンとしたが、すぐに

「ありがとう」

小さな声で、そう言った。

決着、そして告げられた。（後書き）

とりあえず、今回で一輝との1回目の戦闘は、終了しました。
いくつか出したかった武器が出せたのは、書いてて嬉しかったです。

戦闘シーンですが、本当はもっと派手にしたり、長く書きたかったのですが、中々うまくいきませんでした。

それと、武器が本編では、上手く説明できなくて、後書きに頼りっぱなしに

なりかけてしまっているのは、何とかしたいのですが、本編であまりグダグダ書いても読みにくいですね？

一輝はこれでまた、暫らくは登場しなくなります。

その内、一輝サイドの話も書こうと思いますが、それは恵吾サイドが

ある程度の区切りに、入ってからにしようかと、思っています。

技・武器紹介

*1 『熾天覆う七つの円環』 アーチャー 士郎（Fate / stay night）

本来は飛び道具に対して有効な盾。1枚1枚が、城壁と同等の強度を

誇っている。

*2 『災厄兵器パンドラ』 ダンテ（Devil May Cry 4）

普段はスーツケースの形をしているが、666種類の武器に変

形する。

といっても、原作で使用されたのは6種類のみ。

本編で使ったバズーカ砲は（ヘイトリッド）という名前。

*3 『デibold・ジー・グラビドン』 ブラゴ（金色のガッシュベル）

形状は本編で述べた通りで、空間ごと捻じ曲げて押しつぶす術。

*4 『リベリオン』 ダンテ（Devil May Cryシリーズ）

両刃の長剣。

*5 『光渡し』 優人（おまもりひまり）

他者の力の増幅や、物を強化する力。

これを付加されると、ただの棒きれでも名剣、名刀と同じ位の威力を持つようになる。

*6 『ジオルク』 ダニー（金色のガッシュベル）

自分の肉体をすぐに再生、回復させる。

*7 『シン・サイフォジオ』 ティオ（金色のガッシュベル）
自分以外の、味方を回復させる事ができる。

トラブルと対話

フィーナの言葉を聞き、恵吾は少し照れてしまったので、それを隠す為に

「ほ、ほら此処に居ないで早く戻ろう。って、そういえば僕は一旦、ダルトニアに行かないと、駄目なんだけど…大丈夫？」

そう言うと、

「（コクン）ダルトニアは通過点だから問題無い」

恵吾はそれを聞き安心した。その後、フィーナからその人の事を聞くと

どうやら、怪我ではなく病気だという事が分かった。それと、そこはダルトニアを通過

すると1番早く到着するようだ。2人で話し合った結果、恵吾が城に行っている間に

フィーナが、移動に必要な物資等を準備しておき、恵吾が戻ってから一緒に行く、

という事になった。

恵吾達がブリエスに戻ると、負傷した兵達が居なくなったので、準備も早く

なっており、2日後には出発する事が出来るようになっていた。

恵吾は

その間、マダス達から与えられた部屋に居る事となったのだが、その部屋は宿の

最上級の部屋、少し前までは一般庶民であった恵吾には縁が無かった

装飾等があり、どうにも落ち着かず、部屋の中をウロウロとしている。暫く、そうしていたが、やはり落ち着かな

いので外に出ようとも

考えたが、何かあるといけない、といった理由で数人の兵が着いて来るので

落ち着かない。食事も部屋にメイドが持って来るので、外に出る必要も無い。

はつきり言つて、かなり窮屈な状況だ。ベッドに寝転んでいると、コンコン

部屋の扉がノックと共に向こう側から女の子の声が聞こえた。

「あの、お食事をお持ちしました」

「はい、どうぞ」

そう恵吾が言つと、ゆつくりと扉を開けて小柄なメイドが食事をお盆に

載せて入って来た。

戦闘が予想よりも早く終わったので、食糧に余りがある為、少々豪華だった。

少女はテーブルに食事を置くと、お茶を準備しようとした。

だが、その時、躓いてしまい転んでしまった。それだけなら、まだ良かったかも

しれないが、その時に持っていたポットは手を滑り抜けて、椅子に座ろうと

していた恵吾の頭の上に落ちてしまった。

「あちゃーっ、だ、だ、頭が・・・」

そして、突然の衝撃と共に頭や顔に熱いお茶が掛かり、混乱しながら恵吾は床を

転げ回った。

「はあはあはあ、び、びつくりした・・・」

少し落ち着いた恵吾がそう言い、立ち上がると床にはポットと零れたお茶があり、

それと、顔が真っ青になり座り込んでいる少女が居た。

「あ、あの、私……」

動揺し、何を言えば良いか分からず、困惑していると、

「恵吾殿、どうされました!？」

外に居た兵の声が聞こえた。それを聞くと、少女は体を震わせ、先程よりもさらに

顔を青くしている。

「……何でもありません。ちょっと転んだだけです」

「そうですか? なら良いのですが……」

そう言つと再び静かになった。それを確認した恵吾が少女に近付き手を差し出し

起こすと

「あ、あの、すみません。私、恵吾様にご無礼を……」

そう言い頭を下げた。まだ、体を震わせているが、先程よりは少しだけ顔色が

良くなっている。

「ああ、気にしなくて良いよ。ちょっと熱かったけど、大丈夫だから……」

恵吾がそう言つと、頭を上げた。目には涙を溜め今にも泣きだしそうだった。

それを見て恵吾は罪悪感を受けた。

「それで、えつと……」

「あ、マリナと言います」

「マリナ ちゃん? 僕は本当に大丈夫だから気にしなくて良いよ」

それを聞くと、マリナは落ち着いたように涙をふくと

「はい。ありがとうございます」

そう言つと、落としたポットやお茶を片付けて、部屋を出て行った。

マリナを見送った後、食事をして暫くすると再びマリナが今度は

食器類を

片付ける為に恵吾の部屋に入ってきた。

「お食事はお済ですか？でしたら、食器を下げますが・・・」

「ああ、ありがとう。もう終わっているから大丈夫だよ」

それを聞き、マリナは食器を持つと、お辞儀をして部屋を出た。

部屋を出たマリナが食器を持ち、厨房に戻ると3人のメイドが近付いて来た。

「あら、マリナ。あんた無事だったの？ てっきり、何か粗相でもして首を斬られてると思ってたけど」

真中に居たメイドがニヤニヤしながらマリナにそう言うと、他の2人もクスクスと

笑っている。それを聞きマリナは顔を俯かせながらも、無視をして進もとしたが、

「ねえ、聞いているの？ あんたみたいに暗い子、仕事が務まったの？」

「……………」

マリナは3人を避けると、そのまま厨房に走って行った。それを、見て3人は

「まったく、嫌になるわね。あんなのと一緒に仕事なんて」

「ええ、どうにか居なくなればいいかしら・・・」

「それなら良い手があるわよ。あのね……………」

夕食後、暫く部屋に居た恵吾に、部屋の前に居た兵から

「恵吾様、お風呂の準備が出来ましたが、どうされますか？」

「お風呂か……………」

今日はそれなりに汗を掻いたのと、元々、風呂好きだった事もあり入る事にした。

風呂はこの宿の1階にあり、かなりの大きさである。兵達と共に

風呂に行くと

そこには誰も居ない。

「あれ？他の人は？」

恵吾の質問に、兵の内の1人は

「今は恵吾様の貸し切りです。我等は恵吾様の後に入らせて頂きます」

それを聞き、恵吾は少し申し訳なく思うが折角なのだから、と楽しむ

事にした。

「ふ〜〜、良い湯だな。やっぱりお風呂は良い……」

恵吾は体を洗うと湯船に入り、リラックスしていた。

「しかし、シャワーが無いと少し不便だな。まあ、贅沢は言えないな」

そう呟いていた時、脱衣所から小さな物音がした。

「っ！……」

恵吾はすぐに周囲を警戒し、湯気で見にくいので『白眼』を発動させていると、

脱衣所との間の扉が開く。すぐにそちらを見ると、そこにはタオルを体の前に当てただけのフィーナが居た。

「……へ？ え？え、ええー……っ！！」

恵吾はおそらく人生で最大の混乱と、大声を記録したであろう状態になった。

もし、普通にしていれば湯気である程度は目隠しになっただろう。だが、『白眼』が湯気を透視しているので、フィーナの綺麗な白い肌や、

胸元の僅かに膨らみが完全に見えてしまったのだ。

この状況に冷静になる事など、不可能といっても過言ではない。混乱を極めている恵吾を余所にフィーナは少し顔を赤くしながらも、

恵吾に近付いて来る。

「え、ちょ、いや、あれ、え、え？」

まともに話せていない恵吾にフィーナは

「落ち着いて、深呼吸」

「あ、ああ。 すー、はぁー、 すー、はぁー……よし落ち着いた。それで、何でここに？ というかその姿は？」

『白眼』を解除し、後ろを向くとそのままの状態でフィーナに話し掛けてみると

「あなたは、私の願いを聞いてくれると言った。だから、私に出来る事は可能な限り行いたいと思った。男はこういった事が好きだと思った。違った？」

「いや、違わないけど……とにかく今は戻って！ 恥ずかしいから」

それを聞き、少し考え込んだが

「…分かった」

そう言い、出て行った。

「……… なんか、どっと疲れた。 っていうかフィーナどうやって入って来たんだ？」

些細な疑問を持ちつつも、再び浴槽に入りリラックスする事にした。

「ふう、…それにしても驚いたな。 フィーナがあんな……」

そう言つと、風呂場で見たフィーナを思い出してしまった。

「…… 止めとこう。 これ以上はきつい」

そう言い、頭を軽く振り一旦、忘れる事にした。 脱衣所を出て部屋に戻った

恵吾は、ベッドに寝転ぶと直ぐに眠気が襲って来て、眠りに着いた。

恵吾は夢を見ている。 それはこの世界に来る前の生活、暫く、そのまま見ていると、一輝が出てきた。そして、

「まったく、昼間は大変だったな。体中が痛かったぞ」

「……？」

恵吾には意味が分からなかった。昼間と言われても、今日は一輝に会っていない。

なのに何故？ そう思っていたが、すぐに意識がはつきりし

「そうか、これは夢か……」

「ああ、ようやくはつきりしたか」

一輝は呆れたように言うと思吾が

「悪い悪い、ってどうやて僕の夢に入ってきたの？ ……まさかこの一輝は僕の夢の中の登場人物なのか？」

まさかと思い、そう言ってみると

「違うわ！ 『ユメグラス』*1と『夢コントローラー』*2で入ったんだ」

それを聞き納得した。だが、それと同時に疑問が浮かび

「ああ、なるほど。ってちよつと待て。あれは対象を直接見ないと駄目なんだぞ。つまり僕の部屋に入ってるって事か？ 一体……」

何となく予想はついていのだが、

「もちろん『どこでもドア』*3で入ったに決まってるだろ」

それを聞き恵吾は頭が痛くなった。そして、同時に秘密道具の性能に少し疲を感じた。

「……ドラえもんの道具って今さらだけど、ある意味、どんな宝具よりも危険な気がするんだけど……」

ついつい、溜息と共に呟いた。

「まあ気にするな」

「……それで、何の用なの？」

「ああ、今後の事について話し合いをしようと思っとな」

一輝は真剣な表情になるとそう告げる。恵吾も真剣な表情になると話し合いを始める。

「とりあえず、こっちの今の状況は、侵略に失敗したのと俺が引き分けた事で、かなり動揺が広がってて、侵略は不可能って事で退却

した」

退却した事に安堵し、眩くと気になっていた事を一輝に聞いてみる事にし

「そっか、…それでこの戦争は元々なにが原因か分かる？」

そう言つと、一輝は

「ああ、確かそっちの国が攻めて来たから、それを迎撃してるうちにこっちから攻めよう、って話になったみたいやぞ。…ただ、何かキナ臭い感じがするんだよねあゝ」

最後にそう付け加える。

「…分かった、なら僕の方でも色々調べてみるわ。…そう言えば、一輝って、こっちではかなり恐れられているみたいやけど、一体何をしたの？」

「ああ、こっちに来てから何度か戦場に出たんやけど、その時に『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』*4とか『エクシア』*5で殲滅したりしてたから、多分それが原因だと思っぞ」

一輝の使用したのを聞き、呆れて

「おいおい、そりやまあ恐れられて当然だな……………」

そう言い終わると、2人は少しの間、何も言わなかったが

「さて、それじゃあ、そろそろ帰るで。それじゃ」

「ああ、んじゃ」

一輝がそう言い、恵吾の夢から出て行った。

トラブルと対話（後書き）

お久しぶりです。更新が、かなり遅くなってしまいました。リアルが忙しく中々筆が進まず、今日まで掛かる事となりました。

それと、最近撮り溜めてた深夜アニメを見ていたりした所為もあり大変です（笑）

技・道具紹介

*1 『ユメグラス』 ドラえもん （ドラえもん）
かけると、他人の夢を見る事が出来るようになる。

*2 『夢コントロール』 ドラえもん （ドラえもん）
『ユメグラス』を掛けた状態見た夢を自在に操れる。
また、夢の中に入る事も出来る。

*3 『どこでもドア』 ドラえもん （ドラえもん）
行きたい場所を思い浮かべて、ドアを開けるとそこに行ける。但し特殊空間や地図に登録されていないといけない。それと、他人に見られたくない場所には入れない。

*4 『王の財宝』 ギルガメッシュ （FATEシリーズ）
バビロニアの宝物庫と、そこに繋がる鍵剣。
収納してある武器を、弾丸のように大量に放出できる。
中には、どれだけでも入るので武器以外にも収納可能。

*5 『エクシア』 刹那 （機動戦士ガンダム00）
運動性に優れたフレームを持つ。近接格闘用に発展・特化されている。

各部に5種7本の剣を装備している。他にバルカンやライフルになる剣も
装備している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529v/>

飛ばされた2人のチート

2011年11月24日21時03分発行